

607

607-396



1200501533033

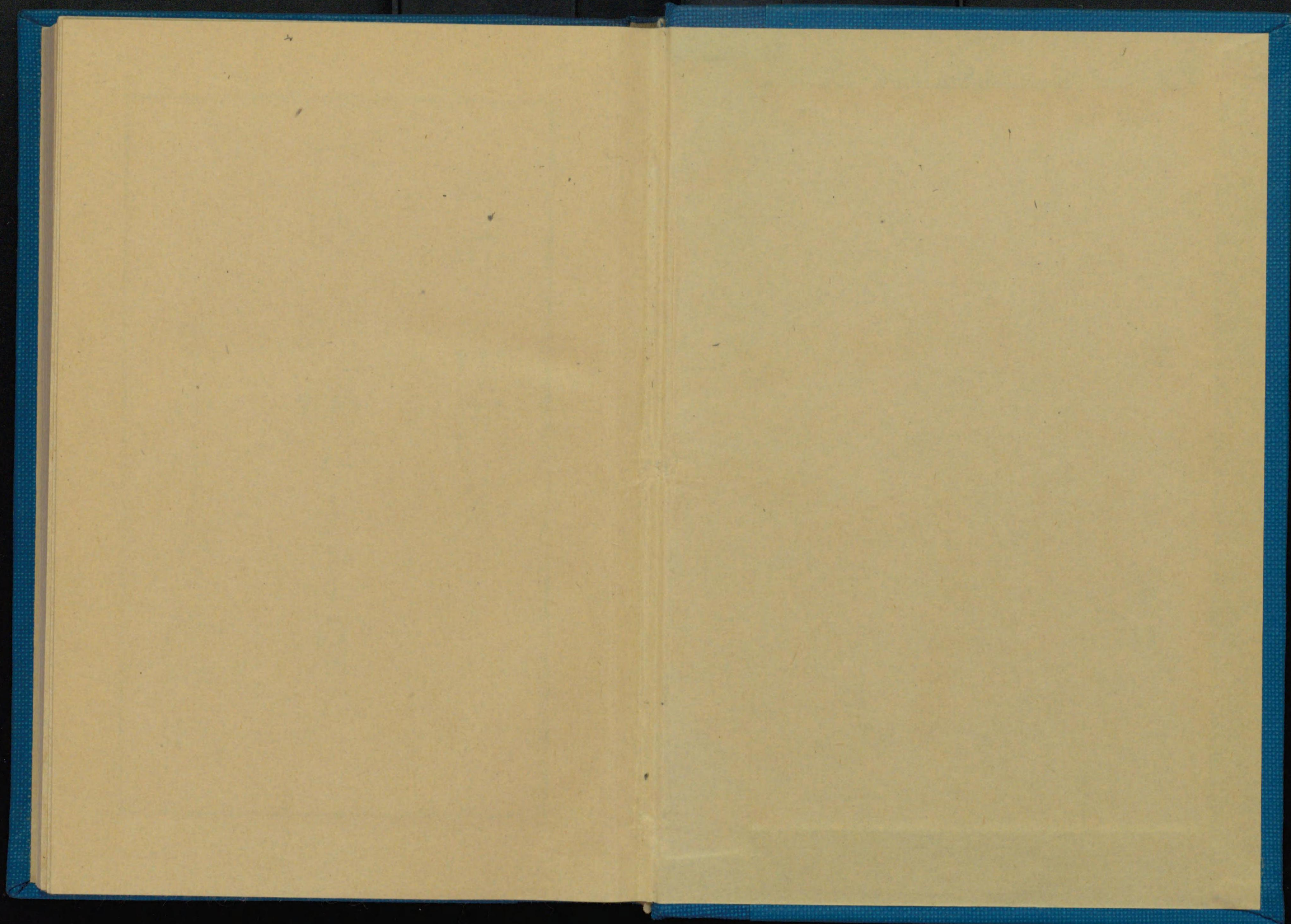
96

事故本

書き込み多数

同本複本なし

2010.5.25



1922

永井荷風著

つゆは
た
河
の
ま
ま
な
ま

東京中央公論社版



607-396

老いて病める身は日頃丸の内の新市街を過るをりとてもなかりしに。偶中央公論社と長島中君の書に接し其事務所に至らむとて始めて丸ビルの昇降臺に乗りて五階に登りぬ。平生無きことなれば意外の一奇事ともいふべくや。刺を通じて俟つこと須臾。島中社長われを迎へて曰く。このとし頃中央公論に寄稿せられし短篇小説既に四五篇に上りたり。聚めて一巻となし敝社より刊行したまはずやと。我は答へて拙稿の貴誌に載せらるゝさへ一方ならぬ幸となして心窃に社長の厚遇を感謝しつゝあるなり。されど時勢は既に一變せり。老朽吾輩のごとき作者の小説を公にするも果してよく售ることを得る

や否や。我は既に躬ら怪しみて丸ビルの樓上に登りしことを奇となせり。若し拙著の出版幸にして貴社の損失たらざることを得む歟。いよ／＼奇中の奇と謂はざる可らずといふに。社長微笑みて。深く憂ることを休めよ。事實は往々小説よりも奇なりといふ事あり。奇中更奇を生ずるも何ぞ怪しむに足らむや。余は兩三日にして滿鮮遊歴の途に上るべければ請ふ速に玉稿を裏次して送付せられむことをと。重ねてわれは社長の厚意を謝し家に歸るや直に舊草を次序して朱を加へたり。昭和六年辛未の歲九月初二麻布の廬にて永井荷風しるす。

つゆのあとさき目次

つゆのあとさき

一

あぢさゐ

一九三

榎物語

一一二

かたおもひ

一四二

夜の車

一六三

カツフエー一夕話

一七五

かし間の女

一九一

ちぐらし髪

四〇七

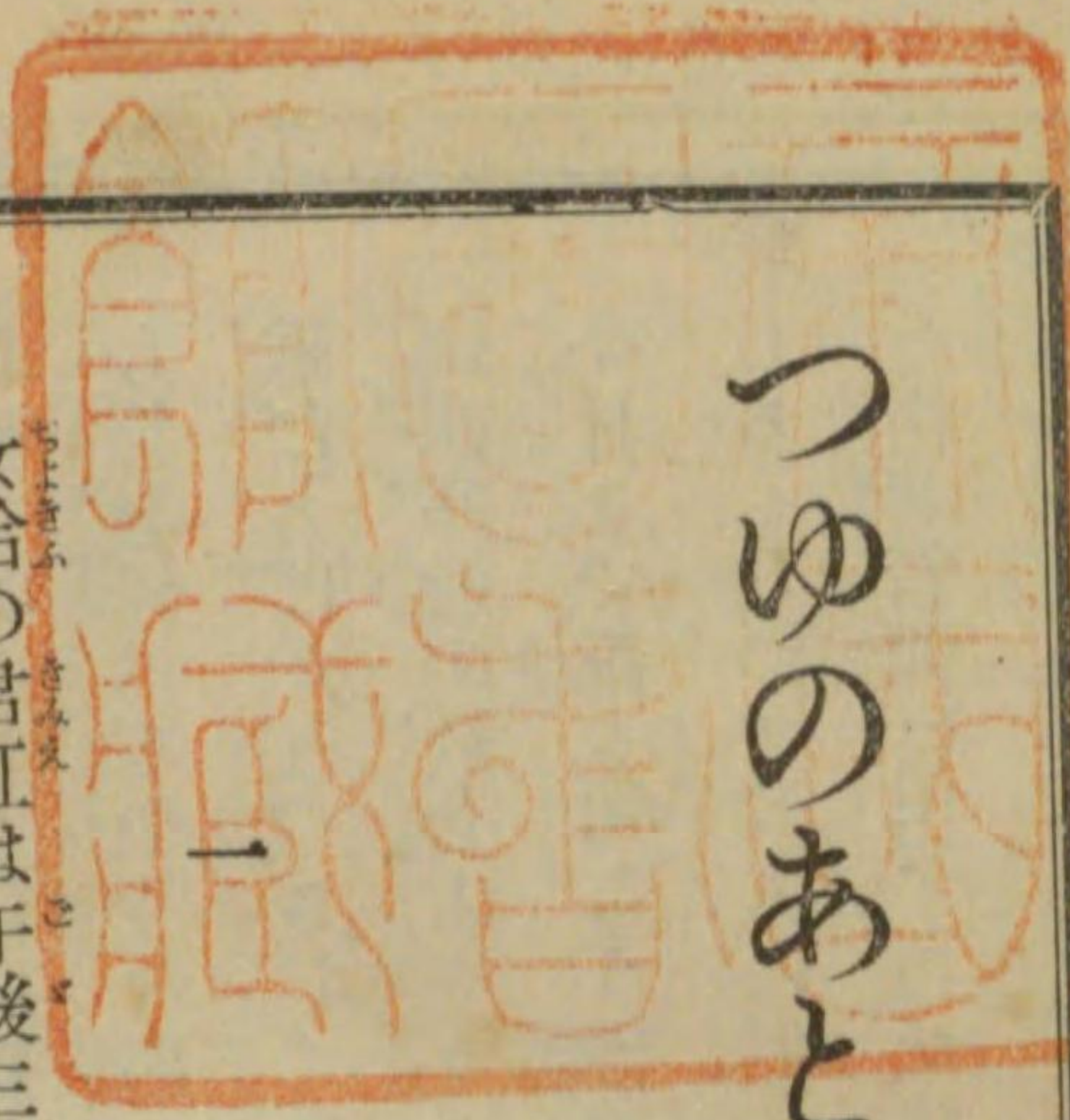
一 収載の諸篇はほど執筆の年月に基きその最近きを先となし遠きを後にしたり。

一 編輯及校正の事は友人日高基裕君に請ひて其力を借ることに尠しとせず。茲に之を謝す。

一卷中夜の車及ちゞらし髪二篇を除きて他は凡て一たび中央公論の誌上に載せしことあり。

著者識

つゆのあとさき



女給の君江は午後三時から其日は銀座通りのカツフエーへ出ればよいので、市ヶ谷本村町の貸間からぶら〜堀端を歩み見附外から乗つた乗合自動車を日比谷で下りた。そして鐵道線路のガードを前にして、場末の町へでも行つたやうな飲食店の旗ばかりが目につく横町へ曲り、貸事務所の硝子窓に周易判断金龜堂といふ金文字を掲げた賣卜者をたづねた。
去年の暮あたりから、君江は再三氣味のわるい事に出遇つてゐたからである。同

い事であるが、風呂屋の番頭さへ氣のつかない事を、どうして新聞記者が知つてゐたのだらう。君江はこの不審と、去年からの疑惑とを思合せて、これから先どんな事が起るかも知れないと、急に空おそろしくなつて、今まで神信心は勿論、お神籤一本引いたことのない身ながら、突然占ひを見てもらふ氣になつたのである。

アパートメントの一室を店にしてゐる新時代の賣卜者は年の頃四十前後、口髭を刈り洋服を着、鼈甲のロイド眼鏡をかけ、デスクに凭れて客に應對する様子は見たところ醫者か辯護士と變りはない。省線電車の往復するのが能く見える硝子窗の上には『天佑平八郎書』とした額を掲げ、壁には日本と世界の地圖を貼り、机の傍の本箱には棚を異にして洋書と帙入の和本とが並べてある。

君江は薄地の肩掛を取つて手に持つたまゝ、指示された椅子に腰をかけると、洋装の賣卜者はデスクの上によみかけの書物を閉ぢ廻轉椅子のまゝぐるりと此方へ向直つて、

「御縁談ですか。それとも大體にお身の上の吉凶を見ませうか。」とわざとらしく笑顔をつくる。君江は伏目になつて、

「別に縁談といふわけでも御在ませむ。」

「では、まづ大體の事から拜見しませう。」と易者は恰も婦人科の醫者が患者の容態をきくやうに、成りたけ氣がねをさせまいと苦心するらしい碎けた言葉づかひになり、「占ひを見つけると面白いものと見えまして、いろ／＼なおお客様がお出になりませ。毎朝會社のお出がけにお寄りになつて、其日々々の吉凶を見る方もあります。然しむかしから當るも八卦、當らぬも八卦といふ事がありますから、凶の卦に當つてもあまりお氣におかけなさらん方がよいです。お年はおいくつで居らつしやいます。」

「丁度で御在ます。」

「それでは子の年でゐらつしやいますな。それからお生れになつたのは。」

「五月の三日。」

「子の五月三日。さうですか。」と易者はすぐに筮竹を把つて口の中で何か呟きながらデスクの上に算木を並べ、「お年廻りは離中斷の卦に當ります。併し文字通り易の釋義を申上げてても廻遠くて要領を得ない事になりませうから、わたくしの思ひついた事だけを手短かに申上げて見ませう。大體を申上げると、この離中斷の卦に當る方は男女に限らず親兄弟にはなれ友達も至つて少く一人で世を渡る傾きがあります。それにあなたのお生れになつた月日から見ますと、遊魂巽風の卦に當ります。これは一時お身の上に変つた事が起つても、その變つた事が追々元の形に立戻るといふ卦であります。この卦から考へて見ますと、現在のお身の上は一時變つた事の起つた後、追々もとのやうになつて行かうと云ふ間のやうに思はれます。天氣に例へて申上げれば暴風のあつた後、その名残りがなかく、静まらない。併し追々静かになつて、やがてもとの天氣にならうといふその途中だと申したらよいでせう。」

君江は膝の上に肩掛を弄びながらぼんやり易者の顔を見てゐたが、その判断は全

くその身に覺えがない事ではない。どこか當つてゐる處があるので、何となく氣まりのわるいやうな心持で再び伏目になつた。一時身の上に変つた事が在つたと言ふのは、大方兩親の意見をきかず家を飛出し、東京へ来て、とうとう女給になつた事だらうと思つたのである。

君江が家を出たわけは兩親はじめ親類中舉つて是非にもと説き勧めた縁談を避けやうが爲めであつた。君江の生れた家は上野停車場から二時間ばかりで行かれる埼玉縣下の□□町に在つて、その土地の名物になつてゐる菓子をつくる店である。君江は小學校の友達の中で、一時牛込の藝者になり、一年たつたかた、ぬ中身受をされて、人の妾になつてゐた京子といふ女と絶えず往來をしてゐたので、田舎者の女房などになる氣はなく、家を逃げ出して其のまゝ、京子の家に厄介になつた。田舎から迎ひの人が来て、二三度連れ戻されても又すぐ飛出す始末。親達も困りぬいて、君江の我儘を通させ銀行か會社の事務員になる事を許した。

つて行くのですから、此れから先たいした事件が起らうとは思はれません。然し何か御心配な事があつて、その事をどうしたらいいかと思召すなら、其の特別な事について、もう一度見直ませう。それで大抵お心當りがつくだらうと思ひます。」と易者は再び筮竹を取り上げた。

「實はすこし氣にかゝる事が御在まして。」と君江は言ひかけたが、まさか黒子の事は明らさまに言出しにくいので、「自分には別に覺がないんですけれど、誰かわたくしの事を誤解してゐる人がありはしないかと思ふやうな事が御在ます。」

「はい。はい。」と易者は仔細らしく眼を閉じて再び筮竹を數へ算木を置き直して、「成程。この卦は物に影の添ふ事を意味します。して見ると、何か御自分でいろいろ思ひすごしをなさるのですな。それがため無い事も有るやうに思はれて來ます。

唯今の言葉で申すと幻影と實體ですな。物があつて影の生ずるのが自然であります。時と場合には、それとは反對に影から物の起ることもあります。それ故まづ影

をなくすやうになされば、自然と物事は落つく處へ落ちついて行くわけで。さういふ御心持で居らつしやれば、別に御心配には及ばないと思ひます。」

君江は易者のいふ事を至極尤だと思ふと、自分ながらつまらない事を氣に掛けてゐたと、忽ち心丈夫な氣になつてしまつた。それでもまだ何やらさいて見たいやうな心持がしながら、然しあまり細微な事まで問掛けて、それがため現在の職業はまだしもの事、二三年前京子と二人で待合や媒介所を歩き廻つた事まで知られてはと、底氣味のわるい心持もする。猫の死骸や櫛のなくなつた事もきいて見ようとは心づきながら、カツプエーへ行く時間が氣になるので、今日はこのまゝ立去らうと考へ、

「失禮ですが、御禮は。」といひながら帶の間へ手を入れる。

「壹圓いたゞく事にしてありますが、いかほどでもお思召しで宜しいのです。」
出入口の戸があいて、洋服の男が二人無遠慮に君江の腰をかけてゐるすぐ側の椅

子に坐つたのみならず、其一人はぎよろりとした眼付の、どうやら刑事かとも思はれる様子に、君江は横を向いたまゝ椅子から立つて、易者にも挨拶せず、戸を明けて廊下へ出た。

建物を出ると、おもては五月はじめの晴れ渡つた日かげに、日比谷公園から堀端一帯の青葉が一層色あざやかに輝き、電車を待つ人だまりの中から流行の衣裳の翻へるのが目に立つて見える。腕時計に時間を見ながら、君江はガードの下を通りぬけて、數寄屋橋のたもとへ來かゝると、朝日新聞社を始め、をちこちの高い屋根の上から廣告の輕氣球があがつてゐるので、立留る氣もなく立留つて空を見上げた時、後から君江さんと呼びながら馳け寄る草履の音。誰かと振返れば去年池の端のサロン・ラックで一緒に働いてゐた松子といふ年は二十一二の女で。その時分にくらべると着物も姿もすつと好くなつてゐる。君江は同じ經驗からすぐに察して、「松子さん。あなたも銀座。」

「えゝ。いゝえ。」と松子は曖昧な返事をして、「去年の暮、暫くアルプスにゐたのよ。それから遊んでゐたの。だけれど又どこかへ出たいと思つて實はこれから五丁目のレーニンつていふ酒場。君江さんも御存じでせう。あの時分ラックにゐた豊子さんが居るから、鳥渡様子を見て來ようと思つてゐるの。」

「さう。あなた、アルプスにゐたの。ちつとも知らなかつたわ。わたしはあれからずつとドン・フワンにゐるわ。」
「此の春だつたか、アルプスでお客様から聞いたことがあつたわ。お逢ひしたいと思つてもつい時間がないでせう。あの、先生もお變りがなくつて。」

君江は小説家清岡進の事にちがひないとは思ひながら、數の多いお客の中には、辯護士の先生もあれば、醫者の先生もあるので、それとなく念を押すに若くはないと、「えゝ。この頃は新聞の外に映畫や何かで大變おいそがしいやうだわ。」
松子は之を何と思ひちがひをしたのか、「アラ、さう。」といかにも感に打たれたら

しく深く息を呑んで、「男はいざとなると薄情ねえ。わたしもい、経験をしたのよ。だから今度は大に發展してやらうと思つてるのよ。」

君江は心の中で高が五人か十人、數の知れた男の事を大層らしく経験だの何だのと言ふにも及ぶまいと、可笑しくなつて来て、からかひ半分、わざと沈んだ調子になり、「あの先生には立派な奥様はあるし、スターで有名な玲子さんがあるし、わたし見たやうな女給なんぞは全く一時的の慰み物だわ。」

橋を渡ると、人通りは尾張町へ近くなるに従つて次第に賑かになる。それにも係らず松子は正直な女と見えて、忽激した調子になり、

「だつて、玲子さんが結婚したのは、先生が君江さんを愛した爲だつていふ評判よ。さうぢやないの。」

君江はあたりを憚らぬ松子の聲に辟易して、「松子さん。その中ゆつくり會つて話しませうよ。何なら、鳥渡お寄んなさいな。ドン・フワンでも募集してゐるから紹

介してもいゝわ。」

「あすこは今幾人ゐて。」

「六十人で、三十人づゝ二組になつてゐるのよ。掃除はテーブルも何も彼も男の人がするから、それだけ他よりも樂だわ。」

「一日に幾番ぐらゐ持てるの。」

「さうねえ。この頃ちや三ツ持てればいゝ方だわ。」

「それで、綺羅を張つたら、かつゝねえ。自動車だつて一度乗ると、つい毎晩になつてしまふし……。」

君江はこまゝした世智辛いはなしが出ると、他人の事でもすぐに面倒でたまらなくなる。それに又、金なんぞはだまつてゐても無理やりに男の方から置いて行くものと思つてゐるので、人込の中に隔てられたまゝ松子の方には見向きもせず、日の光に照付けられた三越の建物を眩しさうに見上げながら、すたゝ四角を向側へ

と横ぎつてしまつたが、少しは氣の毒にもなつて、後を振返つて見ると、松子は以前の處に立止つたまゝ、挨拶のしるしに遠くから鳥渡腰をかぐめ、それでもう安心したといふ風で、これも忽ち人通りの中に姿を没した。

二

松屋呉服店から二三軒京橋の方へ寄つたところに、表附は四間間口の中央に弧形の廣い出入口を設け、その周圍にDON・JUANといふ西洋文字を裸體の女が相寄つて捧げてゐる漆喰細工。夜になると、此の字に赤い電氣がつく。これが君江の通勤してゐるカツフェーであるが、見渡すところ殆ど門並同じやうなカツフェーばかり續いて、うっかりしてゐるとどれがどれやら、知らずに通り過ぎてしまつたり、わるくすると門ちがひをしないと限らないやうな氣がするので、君江はざつと一年ばかり通ふ身でありながら、今だに手前鄰の眼鏡屋と金物屋とを目標にして、

その間の路地を入るのである。路地は人ひとりやつと通れる程狭いのに、大きな芥箱が並んでゐて、寒中でも青蠅が翼を鳴らし、晝中でも黽のやうな老鼠が出没して、人が來ると長い尾の先で水溜の水をはね飛ばす。君江は袂をおさへ拔足して十歩ばかり。やがて裏通りを行く人の顔も見分けられるあたり。安油の悪臭が襲ふやうに湧き出してくる出入口をくぐると、何處といふ事なく竈蟲のぞろぞろ、這ひ廻つてゐる料理場である。料理場は後から建て増したものらしく、銀座通りに面した表附とはちがつて、震災當時の小屋同然、屋根も壁もトタンの海鼠板一枚で圍つてあるばかり。それでも土間から、急な梯子段を土足のまゝ登つて行くと、十疊ばかり疊を敷いた一室があつて、四方の壁際ぐるりと十四五臺ばかりも鏡臺が並べてある。丁度三時五六分前。十疊の一室は、朝十一時から店へ出てゐた女給と、今方來たものとの交代時間で、坐る場所もない程混雑してゐる最中。鏡一臺の前にはいづれも女が二三人づゝ繡眼兒押しに顔を突出して、白粉の上塗をしたり髪を直したり、或

は立つて着物を着かへたり、大胡坐で足袋をはき替へたりしてゐるのもある。

君江は豎シボの一重羽織をぬいで肩掛と一つにして風呂敷に包んだ。そして廊下への出口に置いてある衣裳棚に、名前の貼紙がしてある處を見て其の包を載せ、コンバクトで鼻の先を叩きながら、廊下づたひにパンツリイを通り抜けると、丁度店二階の方から歩いて来る春代といふ女に出逢つた。歸り道が同じ四谷の方角なので、六十人ある同輩の中では一番心安くなつてゐる。

「春さん。昨夜はグレたんぢやないの。後で何かおごつてよ。」

「それアあなたでせう。わたし随分待つてゐたのよ。今夜はきつと一緒に歸りませう。其の方が經濟だからねえ。」

君江は其のまゝ、表二階の方へ行きかけると、階段の下から下足番をしてゐる男ボーイが「君江さん、電話です。」と頻に呼んでゐる聲が聞えた。

「はアイ。」と大聲に答へながら、口の中で「誰だらう。いけすかない。」とつぶやき

ながら、テーブルや植木鉢の間を小走りに通り抜けて階段を下りて行つた。

階下は銀座の表通りから色硝子の大戸をあけて入る見通しの廣い一室で、坪敷にしたら三四十坪程もあらうかと思はれるが、左右の壁際には衝立の裏表に腰掛と卓子とをつけたやうなボックスとか云ふものが据え並べてあつて、天井からは提灯に造花、下には椅子テーブルに植木鉢のみならず舞臺で使ふ藪疊のやうな植ゑ込みが置いてあるので、何となく狭苦しく一見唯ごたごたした心持がする。正面の奥深い片隅に洋酒を棚に並べた酒場があつて、壁に大な振り時計、その下に帳場があり、續いて硝子戸の内に電話がある。君江は行きちがふ人毎に笑顔をつくりながら、電話室へ駆け込み、「もし〜どなた。」ときくと、電話は君江を呼んだのではなく、清子といふ女給の聞きちがへであつた。

爪先で電話室の硝子戸を突きあけ、「清子さん。電話。」と呼びながら君江は反身に振り返つてあたりを見廻したが、晝間のことで客はわづかに二組ほど、そのまはりに

女給が七八人集つてゐるばかり。植木の葉かげを透して見ても清子の姿は見えない。誰やらが「清子さんは早番でせう。」と云ふ。君江はその通り電話の返事をして硝子戸の外へ出ると、其の姿を見て、洋服をきた中年の瘦せた男が帳場の臺に身を寄せたまゝ、「君江さん。」と呼留めて、「どうしました。占ひは。」

「たつた今、見て貰つたわ。」

「どうでした。やつぱり男のおもひでせう。」

「それなら見てもらはなくても覚えがある筈ぢやないの。もうそんな景氣ぢやないわ。小松さん。わたし大に悲觀してゐるのよ。」

「へえ。君江さんが……。」と小松と云はれた男は圓顔の細い目尻に皺をよせて笑ふ。年はもう四十前後。神田の何とやら云ふダンスホールの會計に雇はれてゐる男で、夕方六時に出勤する頃まで、毎日懇意なカツプエーを歩き廻つて女給の貸間をはじめ、質屋の世話、芝居の切符の取次など、何事にかぎらず女の用を足してやつ

て、皆から小松さん〜と重寶がられるのを此の上もなく嬉しいことにしてゐる男である。いや味な事は言はないかはり、お客になつて飲み食ひもした事がない。以前はどこかの箱屋だともいふし役者の男衆だつたといふ噂もある。君江はこの男から日比谷の占者のことをきいたのである。

「君江さん。どうでした。何か手がかりがありましたか。」

「さア。何だか、いろいろな事を言はれたけれど、何の事だかわけがわからないのよ。わたしの方でも別に何ともきいては見なかつただけけれど。」

「それぢや駄目だ。君江さんと來たら實にのん氣だからな。」

「壹圓損したわ。」と君江は人に問はれて始めて始めて占者の判断の其要領を得てゐなかつた事と自分のきゝ方も随分不熱心であつた事に心づいた。最少し向の困るくらゐ委しくこまかい事まできけばよかつたといふ氣がした。

「でもねえ、小松さん。當分今の通りで別條はないんですとさ。覚えてゐるのはそ

れつきりよ。いろんな事を言はれたけれど『何が何だかわからないのヨ』なのよ。まつたくさ。何しろ占を見てもらふのは生れて初めてござう。見て貰ひつけないと駄目なものねえ。占もやつぱり聞方があるんぢやないか知ら。」

「占ひかたはあつても、別に聞き方はないでせう。」

「それでも、お医者さまでも始めて見てもらふ時には、いろ／＼此方から言はなくつちや、いけないつて云ふぢやないの。だから占や何かでもやつぱりさうだらうと思ふわ。」

表梯子の方から蝶子といふ三十越したでつぶりした大年増が拾圓紙幣を手にして、「お會計を願ひます。」と帳場の前へ立ち、壁の鏡にうつる自分の姿を見て半襟を合せ直しながら、

「君江さん。二階に矢さんが居てよ。行つておあげなさいよ。うるさいから。」

「さつき見掛けたけれど、わたしの番ぢやないから降りて来たのよ。あの人、先に

辰子さんのバトロンだつて、ほんとうなの。」

「さうよ。日活の吉さんに取られてしまつたのよ。」とはなし出した時會計の女が傳票と剩錢とを出す。その時この店の持主池田何某といふ男に事務員の竹下といふのが付き随ひ、コック場へ通う帳場の傍の戸口から出て来る姿が、酒場の鏡に映つた。蝶子と君江とは挨拶するのが面倒なので、さつきと知らぬふりで二階の方へ行く。池田といふのは五十年配の齒の出た貧相な男で、震災當時、南米の植民地から歸つて来て、多年の蓄財を資本にして東京大阪神戸の三都にカツフェーを開き、まづ今のところでは相應に利益を得てゐるといふ噂である。

表梯子から二階へ上つた蝶子は壁際のボックスに坐つてゐる二人連れの客のところへ剩錢を持つて行き、君江は銀座通りを見下す窓際のテーブルを占めた矢さんといふお客の方へと歩みを運びながら、

「いらつしやいませ。この頃はすつかりお見かぎりね。」

「さう先廻りをしちやアするいよ。先日はどうも、すつかり見せつけられました。あんなひどい目に遇つた事は御在ません。」

「矢さん。たまにやア仕方がないことよ。」と愛嬌を作つて君江は膝頭の觸れ合ふほどに椅子を引寄せて男の傍に坐り、いかにも懇意らしく卓の上テーブルに置いてある敷島の袋から一本抜取つて口にくはへた。

矢さんといふのは赤阪溜池の自動車輸入商會の支配人だといふ觸込みで、一時は毎日のやうに女給のひまな晝過ぎを目掛けて遊びに來たばかりか、折々店員四五人をつれて晚餐を振舞ふ。時々これ見よがしに藝者をつれて來る事もある。年は四十前後、二ツはめてゐるダイヤの指環を抜いて見せて、女達に品質の鑑定法や相場などを長々と説明するといふやうな、萬事思切つて齒の浮くやうな事をする男であるが、相應に金をつかふので女給連は寄つてたかつて下にも置かないやうにしてゐる。君江は既に二三度芝居の切符を買つて貰つたこともあるし、休暇時間に松屋へ

行つて羽織と半襟を買つて貰つたこともあるので、この次どこかへ御飯でも食べに行かうと誘はれ、ば、其先は何を言はれても、さう情なく振切つてしまふわけにも行かない位の義理合ひにはなつてゐる。それ故矢さんからひやかされたのを、なまじ胡麻化すよりも明さまに打明けてしまつた方が、結局面倒でなくてよいと思つたのである。矢さんは内心むつとしたらしいのを笑ひにまぎらせて、

「兎に角羨しかつたな。罪なことをするやつだよ。」とテーブルの周圍に集つてゐるお民、春江、定子など三四人の女給へわざとらしく冗談に事寄せて、「お二人でお揃ひのところを後からすつかり話をきいてしまつたんだからな。人中なのに手も握つてゐた。」

「あら。まさか。そんなにいちや／＼したければ芝居なんぞ見に行きやアしないわ。わきへ行くわよ。」

「こいつ。ひどいぞ。」と矢さんは撲つまねをするはづみにテーブルの縁に在つたサ

イダアの壘を倒す。四五人の女給は一度に聲を揚げて椅子から飛び退き、長い袂をかゝえるばかりか、テーブルから床に滴る飛沫をよける用心にと裾まで摘み上げるものもある。君江は自分の事から起つた騒ぎに據所なく、雑巾を持つて来て袂の先を口に啣へながら、テーブルを拭いてゐる中、新しく上つて来た二三人連の客。いらつしやいまして大年増の蝶子が出迎えて「番先はどなた。」と客の註文をきくより先に當番の女給を呼ぶ金切聲。「君江さんでせう。」と誰やらの返事に君江は雑巾を植木鉢の土の上に投付けて「はアい。」と言ひながら、新來のお客の方へと小走りにかけて行つた。

客は二人とも髭を生した五十前後の紳士で、松屋か三越あたりの歸りらしく、買物の紙包を携へ、紅茶を命じたまゝ、女給には見向きもせず、何やら眞面目らしい用談をはじめたので、君江は却てそれをよい事に、ひまな女達の寄集つてゐる壁際のボックスに腰をかけた。テーブルの上には葛羊羹に鹽煎餅、南京豆などが、袋の

まゝ、新聞や雑誌と共に散らかし放題、散らかしてゐるのを、女達は手先の動くがまゝ、摘んでは口の中へと投げ入れてゐるばかり。活動寫眞の評判や朋輩同士の噂にも毎日の事でもう飽きてゐる。睡氣がさしても流石こゝでは居睡りをするわけにも行かないらしく、いづれも所業なげに唯時間のたつのを待つてゐるといふ様子。其の時隅の方でひとり雑誌の寫眞ばかり繰りひろげて見てゐた女が、突然、「アラ、實にシャンねえ。清岡先生の奥様よ。」といふ聲に、ボックスに休んでゐた女は一齊に顔を差出した。君江も葛羊羹を頬張りながら少し及腰になつて、「どれさ。見せてよ。わたしまだ知らないんだからさ。」
「はい。よく御覽なさい。」と以前の女が差付ける雑誌の挿繪。見れば、縁側に腰をかけてゐる夫人風の女の姿で、「名士の家庭。」「作家清岡進先生の御夫人鶴子さまのお姿。」としてあつた。

「君江さん。あんた、何ともない事。そんなもの見て。わたしなら破いてしまひた

くなるわ。」と寫眞の上に南京豆を打ちつけたのは、もと齒醫者の妻で生活難から女給になつた鐵子である。

「あなた。随分焼餅やきねえ。」と君江は却て驚いたやうに鐵子の顔を見返して、「いいちやないの。奥様なら奥様で、氣にしないでつて。」

「君江さんは全く徹底してゐるわ。」とダンス場から轉じてカフエーに來た百合子といふのが相槌を打つと、もとは洋髪屋の梳手であつた瑠璃子といふのが、

「兎に角一番幸福なのは清岡さんよ。令夫人はシャンだし、第二號は銀座に於ける有名なる女給さんだし……。」

「ちよいと何が有名なのさ。止して頂戴よ。」と君江はわざとらしく憤然と椅子を立つて、先刻から打捨て、置いた自動車商會の矢田さんの方へと行つてしまつた。女

達は無論戯れとは知りながら、少し心配したやうに齊しく其の後姿を見送つたが、瑠璃子はもと／＼梳手の時分ない／＼×××に出没して君江とも一二度言葉を

交へた間柄。偶然このカフエーで邂逅しても、互に默契する處があるらしく秘密を守り合つてゐるくらゐなので、何を言つても又言はれても互に氣を悪くする筈はないと、平氣な顔で、折からテーブルを叩くらしい音がするのを聞きつけ、自分が持番の客ではないかと、音する方へ目を注ぐ。丁度其の途端、階段から上つて來る新しい客の洋服姿が向の壁の鏡に映つたのを早くも認めて、「アラ清岡先生よ。」と瑠璃子は小聲で一同に知らせた。

「先生。くしやみが出なかつて。」と君江とは仲の好い春代が逸早く駈寄つて、「あつちのボックスがいゝわよ。」と洋服の袖に縫り、人目につかない隅のボックスへ連れて行つた。これは君江を張りに來る自動車屋の矢田さんが、まだ歸らずにゐるので、萬一の事を用心した春代の心づかひである。

「歩いて來るともう暑い。黒ビールか何か貰はうよ。」と清岡進は抱えてゐた新刊雑誌と新聞紙とをテーブルの下の揚板に押入れ、新し

い鼠色の中折帽をぬいで造花の枝にかけた。紺地二重ボタンの背廣に蝶結のネキタイ。年の頃は三十五六。鼻先と頤のとがつてゐるのが目に立つので、色の白い眼の大きい頬のこけた顔立は一層神経質らしく見えるのに、長く伸ばした髪をわざと無造作に後に掻き上げてゐる様子。誰が目にも新進の藝術家らしく、また宛然活動寫真中に現れて来る人物らしくも見える。その父は漢學者だとかいふ事であるが、清岡は仙臺あたりの地方大學に在學中も學業の成績は極めて不出来で、卒業の後文學者の仲間入はしたものの、つい三四年ほど前までは、更に月旦に登るやうな著述もなかつた。然るに、何から思ひついたのやら、ふと曲亭馬琴の小説夢想兵衛胡蝶物語を種本にして、原作の紙鳶を飛行機に改め、「彼はどこへでも飛んで行く。」といふ題をつけ、全篇の趣向をそのまゝ、現代の世相に當てはめた通俗小説を執筆して、或新聞に連載した。これが偶然大當りにあたつて、新派俳優の芝居や活動寫真にも仕組まれ、爾來名聲は藉然として、一作ごとに高くなり、今日では大抵の雑誌や新聞

に清岡進の名を見ないものはないやうな勢になつた。

「これも先生の御本。」と春代は遠慮なくテーブルの上の一冊を取り上げ口繪を見ながら、「これはまだ活動にはならないんでせう。」

清岡はわざとうるさいやうな顔をして、「春さん。鳥渡電話を掛けてくれ。□□新聞の編輯局に村岡がある筈だから。京橋の□□番だよ。呼出してすぐこゝへ來いて。」

「村岡さんて、いつもの村岡さん。」

「さうだよ。」

「京橋の□□番だわね。」と春代が行きかけた時、持番の定子といふのが、黒ビールと南京豆の小皿を持って来て、酌をしながら、「わたし、先生の小説には思出の深い事があるのよ。あの時分、別に役も何も付いた譯ぢやないけれど、始めて蒲田へ這入つたのよ。」

「定さん。蒲田にゐた事があるのか。」と清岡はコップを片手に定子の顔を斜に見上げながら、「どうして止したんだ。」

「どうしてつて。見込みがないんですもの。」

「お世辭ぢやないが、定さんのやうな顔立なら映畫には向くんだがね。監督の言ふ事を聽かないからだらう。女は何になつても男の後援がなくつちや駄目だからな。女流作家だつて少し賣り出すまでには、みんな背景があるんだよ。」

その時君江が巻煙草を啣へながら歩いて来て、黙つて清岡の側に腰をかける。春代が戻つて来て電話の返事を傳へ、そのまゝ腰をかけて、

「先生。何か御馳走してよ。君ちゃんは。」

「わたし此の方がいゝわ。」と清岡が飲残した黒ビールのコップを取上げた。

「おむつまじい事ね。ちやア、春代さん、チキンライスか何か一緒にたべませう。」と定子は帯の間から取出す傳票紙に注文の品を書きながら立つて行つた。

明け取りの窓にさしてゐた夕日の影はいつか消えて、階段の下から突然蓄音機が響き出した。これが五時半になつた知らせで、三時過から休んでゐた女給も化粧をし直して出て来る。階上階下の電燈には残りなく灯がついて、外はまだ明い夏の夕方、建物の内ばかりは早くも夜の景氣である。

三

歸り途が同じ四谷の方角なので、君江と春代とは大抵毎晩連立つて數寄屋橋あたりから圓タクに乗る。銀座通りでは人目に立つのみならず、其邊にはカツフェーを出た酔客がまだうろ／＼徘徊してゐるので、これを避けるため、少し歩きながら、通り過る圓タクを呼び止め、値切る上にも賃金を値切り倒して、結局三十錢位で承知する車に乗るのである。其晩二人は數寄屋橋を渡つてガードの下を過ぎ、日比谷の四辻近くまで来たが、三十錢で承知する車は一臺もない。春代は腹立しげに「何だ

い馬鹿にしてゐる。停るかと思つたら、あいつも行つてしまつた。

「いゝわよ。ぶら〜歩きませうよ。少し酔つたから丁度いゝわよ。」

「もうすつかり夏だわねえ。御堀の方を見ると、まるで芝居の背景見たやうねえ。」

日比谷の四辻には電車を待つ人がまだ大分立つてゐる。

「今夜は節約して電車に乗らうよ。」

二人は道幅のひろい四辻を歩道から線路の方へと歩み寄らうとした時、横合ひか

らぬつと二人の前へ立ちふさがつた洋服の男があつたので、二人はびつくりして其

の顔を見ると、今日も午後にはカツフェーへ来てゐたダイヤモンドの矢田さんであつ

た。

「まア、大變御ゆつくりねえ。どこで飲んで居らつたの。」

「送つてあげやう。」と矢田は圓タクを呼びかけた。

「わたし、電車でいゝのよ。お客様と自動車に乗るのはやかましいから。」と春代は

體よく逃げやうとすると、矢田は、度々その手を食つてゐると見えて、

「それア銀座通りのことぢやないか。こゝまで来れば構やせむ。僕が責任を負ふ。」

「あなたも節約して電車になさいよ。矢さん。」と君江は丁度來かゝつた赤電車の方

へとすた〜行きかけたので、矢田は兎や角言つてゐる暇もなく、二人の後につい

て新宿行の電車に乗つた。

案内すいてゐる車の中には、二人の知らない他の店の女給が三人ばかりに、男が五

六人。いづれも居睡りをしてゐる。半藏門を過ぎて四谷見附に來かゝる時まで、矢

田はさすがにおとなしく、連れではないやうな風をして口もきかずにゐたが、君江が

春代を残して一人車から降りかけるのを見るや否や、あわてゝ其の後について來て、

「君江さん。もう乗換はないせ。自動車を呼ばう。」

「いゝのよ。すぐ其處ですから。」と君江は人通りの絶えた堀端を本村町の方へと歩

いて行く。圓タクの運転手が二人の姿を見て、窓から手を出し指で賃錢の割引を示

すものもあれば、垢じみた顔を出してひやかすものもある。矢田はびつたり寄添ひ、「君江さん。どうしても家へ歸らなくつちやいけないのか。一晚ぐらゐ都合できないのか。エ、君江さん。どうしてもいけないければ、一時間でも三十分でもいい。話をしてすぐ別れてもいいから、鳥渡つき合つてくれ。僕はそんな無理なことは決して言はない。今夜の中にきつと歸すから。」

「もう晩すぎるわよ。ぐづぐづしてゐると、わたし歸れなくなつてしまうから。それに明日は早番だから。」

「早番だつて、あすこは十一時ぢやないか。こんな事を言つてぐづぐづしてゐる中に時間がたつてしまふぢやないか。この近邊はいけないのか。荒木町か、それとも牛込はどうだ。」と矢田は君江の手を握つて動かない。

「土手上的の道路は次第に低くなつて行くので、一步ごとに夜の空がひろくなつたやうに思はれ、市ヶ谷から牛込の方まで、一目に見渡す堀の景色は、土手も樹木も一

様に蒼く霧のやうにかすんでゐる。そよ／＼と流れて来る夜深の風には青くさい椎の花と野草の匂が含まれ、松の聳えた堀向の空から突然五位鷲のやうな鳥の聲が聞えた。

「アラ。何だか田舎へ行つたやうねえ。」と君江は空を見上げた。矢田はすかさず、「どこか静な處へ行かうぢやないか。一晚位犠牲におしよ。僕のために。」

「矢さん。もしか目付つて、ごたくしたら、あなた。あの人の代りになつて呉れること。わたし、實はもうカッフェーなんかよしたいと思つてゐるの。」と君江は矢田の心を引いて見るつもりで、わざと身を摺り寄せながら静に歩み出した。實は今夜連れられて行つた先で、矢田が氣前好く祝儀を奮發するかどうかを確めて置かうと思つたのである。

「あの人つて、誰だ。この間一緒に邦樂座へ行つた人か。」

「いゝえ。」と言ひかけて君江は心づき、「え、さうよ。あの人よ。」と狼狽へて言直し

た。邦樂座へ一緒に行つたのは旦那でも戀人でも何でもない。つまり矢田さんと同様な其の場かぎりのお客なのである。

「さうか。あの人が君さんの旦那なのか。」と矢田はすつかり本氣にして、「然し、今まで世話をしてゐる關係があつちやア、さう急によしてしまふ譯には行かないだらう。恨まれるのはいやだからな。」

君江は噴き出したくなるのを耐へて、「ですからさ。若しも、萬一の事があつたらつて言ふのよ。知れると面倒だから、今夜の事は誰にも絶対に秘密よ。」

「そんな事は心配しないだつて大丈夫だよ。まさかの時にはさつと僕が引受ける。」と矢田はまづ今夜だけはいよく「自分の物」になつた嬉しさ。人通りのない堀端を幸に、いきなり×××せて女の頬に接吻した。

本村町の電車停留場はいつか通り過ぎて、高力松が枝を伸してゐる阪の下まで来た。市ヶ谷驛の停車場と八幡前の交番との灯が見える。

「あすこの××はうるさいのよ。すこしおそくなると、いろ／＼な事を聞くから、車に乗りませう。」

矢田は此の機逸すべからずと、あたりを見廻したが、折悪しく圓タクが通らないので、二人はそのまゝ立止つた。

「わたしの家はすぐ其處の横町だわ。角に藥屋があるでせう。宵の中には屋根の上に仁丹の廣告がついてゐるからすぐにわかるわ。わたし此の荷物を置いて来るから待つて、ヨ。」

「おい。君さん。大丈夫か。すつぽかしはあやまるせ。」

「そんな卑怯な眞似しやしないわヨ。心配なら一緒にそこまで入らつしやいよ。わたしは歸らないと、いつまでも下のをばさんが鍵をかけずに置くから。」

高力松の下から五六軒先の横町を曲ると、今までひろ／＼してゐた堀端の眺望から俄に變る道幅の狭さに、鼻のつかへるやうな氣がするばかりか、兩側ともに屋並

の揃はない小家つゞき、その間には潜門や生垣や建仁寺垣なども交つてゐるが、いづれも破れたり枯れたりしてゐるので、あたりは一層いぶせく貧し氣に見える。君江は軒先に魚屋の看板を出した家の前まで来て、「こゝで待つてゐらつしやい。」と言ひすて、魚屋の軒下から露地へ這入つた。矢田はすぐに其の後について行かうとしたが、君江の感情を害しはせぬかと遠慮して、暫く首をのばして眞暗な露地の中をのぞくと、がたり／＼といかにも具合のわるさうな潜戸の音がしたので、いくらか安心はしたものの、どうも、様子が見届けたくてならぬところから、一步二歩とだん／＼露地の中へ進み入ると、忽ち雨だれか何かの泥濘へぐつすり片足を踏み込み、驚いて立戻り、魚屋の軒燈をたよりに半靴のどろを砂利と溝板へなすりつけてゐる。間もなく、君江は出て、

「アラ、どうしたの。」

「イヤ、ひどい道だ。馬鹿にくさい。猫か犬の糞だらう。」

「だから、外で待つてゐらつしやいつて言つたんぢやないの。ほんとに臭いわ。あな。」と君江は寄添ふ矢田からその身を離して、「わたし、草履だから、足袋へくつ付けちや、いやヨ。」

矢田は歩きながら、砂利に靴の裏をこすり／＼もとの堀端へ出ると、丁度曲角の軒下に薪と炭俵とが積んであつたのでやつと靴の掃除をし終つた時、呼びもしない圓タクが二人の前に停つた。

「神樂坂。五十錢。」と矢田は君江の手を取つて、車に乗り、「阪の下で降りやう。それから少し歩かうぢやないか。」

「さうねえ。」

「今夜は何となく夜通し歩きたいやうな氣がするんだよ。」と矢田は腕をまはして軽く君江を×××せると、君江は其のまゝ寄りかゝつて、何も彼も承知してゐながら、わざと、

「矢さん。一體どこへ行くの。」ときいた。

矢田の方でも随分白ばつくれた女だとは思ひながら、其の経歴については何事も知らないで、表面は摺れてゐても、其の實案外それ程ではないのかと云ふ氣もする。此の場合は女の仕向けるがまゝ、至極おとなしい女給さんとして取扱つてゐれば間違ひはないと、君江の耳元へ口を寄せて、「××だよ。」と囁き聞かせ、「差しかへはないだらう。今夜は晚いからね。僕の知つてゐる處がいゝだらう。それとも君江さん。どこか知つてゐるなら、そこへ行かう。」

思ひがけない矢田の仕返しに、流石の君江も返事にこまり、

「いゝえ。何處だつてかまはないわ。」

「ぢや、阪下で降りやう。尾澤カツフェーの裏で、静な家を知つてゐるから。」

君江はうなづいたまゝ、窓の外へ目を移したので、會話はそのまゝ、杜絶する間もなく車は神樂阪の下に停つた。商店は残らず戸を閉め、宵の中賑な露店も今は道端

に芥や紙屑を散らして立去つた後、ふけ渡つた阪道には屋臺の飲食店がところ／＼に残つてゐるばかり。酔つた人達のふら／＼とよろめき歩む間を自動車の馳過る外には、藝者の姿が街をよこぎつて横町から横町へと出没するばかりである。毘沙門の祠の前あたりまで来て、矢田は立止つて、向側の露地口を眺め、

「たしかこの裏だ。君江さん。草履だらう。水溜りがあるせ。」

石を敷いた露地は、二人並んでは歩けない程せまいのを、矢田は今だに一人先に立つて行つたら君江に逃げられはせぬかと心配するらしく、ハメ板に肱や肩先が觸るのにもかまはず、身を斜にしたがら並んで行くと、突當りに、稻荷らしい小さな社があつて、低い石垣の前で露地は十文字にわかれ、その一筋はすぐさま石段になつて降り行くあたりから、其時静な下駄の音と共に棲を取つた藝者の姿が現れたので、二人はいよ／＼身を斜にして道を譲りながら、ふと見れば、亂れた島田の髷に怪し氣な癖のついたのもかまはず、歩くのさへ退儀らしい女の様子。矢田は勿論の事。

君江の目にも寢静つた路地裏の情景が一段艶しく、いかにも深げ渡つた色町の夜らしく思はれて來たと見え、言合したやうに立止つて、その後姿を見送つた。それとも心づかぬ藝者は、稲荷の前から左手へ曲る角の待合の勝手口をあけて這入るが否や、疲れ果てた様子とは忽ち變つた威勢のいゝ聲で、

「かアさん。もう間に合はなくなつて。」

君江は耳をすましながら、

「矢さん。わたしも藝者にならうと思つたことがあるのよ。ほんとうなのよ。」

「さうか。君江さんが。」と矢田はいかにもびつくりしたらしく、其の事情をきかうとした時、早くも目指した待合の門口へ來た。内にはまだ人の氣勢がしてゐたが、門の扉の閉めてあるのを、矢田は「おい〜」と呼びながら敲くと、すぐに硝子戸の音と、下駄をはく音がして、

「どなたさま。」と女の聲。

「僕。矢さんだよ。」

「あら。大變御ゆつくりねえ。」と門の扉を明けた女中は、君江の姿を見て、いくらか調子を改め、「さア、どうぞ。」

女中は廊下の突當りから、廁らしい杉戸の前を過ぎて、瓦塔口の襖をあけ、奥まつた下座敷の四疊半に案内した。今しがた迄お客がゐたものと見え、酒のかをりと共に、煙草の烟も籠つたまゝで、紫檀の卓の溝には煎豆が一ツ二ツはさまつてゐた。女中は片隅に積み載せた座布團を出し、「只今綺麗にいたします。やつと今方片ついた處なんで御在ますよ。」

「大した景氣だな。」

「いゝえ。相變らずで仕様が御在ませむ。」と女中はお定まりの茶菓を取りにと立つて行く。

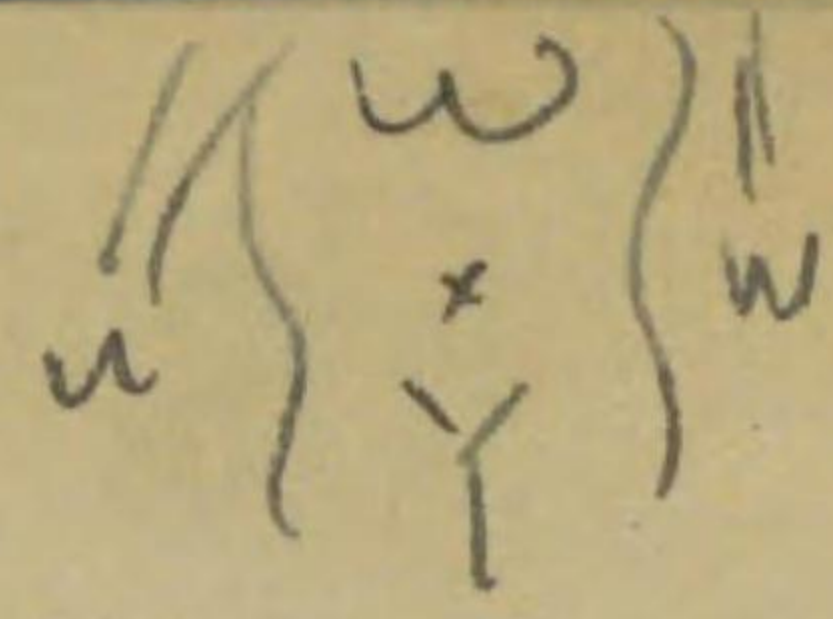
「すこし明けやうぢやないか。」

「蒸し／＼するわねえ。」と君江はゐざりながら手を伸して障子を明けると、土底の外の小庭に燈籠の灯が見えた。

「あら、いゝわね。芝居のやうだわ。」

「カツフェーとは又別だな。これが江戸趣味つて云ふんだらうな。」と矢田は靴踏石の上に兩足を投出して煙草へ火をつけた。

植込を隔て、鄰の二階の窓が見える。簾がおろしてあるが障子の上に、島田に結つた女が立つて衣服をぬいでゐるらしい影のあり／＼映つてゐるのを見て、君江はそつと矢田の袖を引いたが、それと同時に艶しい影は雲のやうに大きく薄くなつたまゝ消え去つて、かすかな話聲ばかりになつた。矢田は何の事やら氣がつかなくなつたらしく、石の上に兩脚を踏みのばしたまゝ洋服の上衣を脱ぎ、ネキタイを解きかけたが、君江は女中が茶運び、續いて浴衣を持つて来る時まで、そのまゝ、ぼんやり隣の火影を眺めてゐた。何ともつかず、突然君江は「待令」といふところへ初めて連



れ込まれた時の事を憶ひ出したからである。場所は牛込ではなく、大森であつたが、中庭を隔てた植込の彼方に二階の灯影を見ながら男と二人縁側に腰をかけて、女中が仕度するのを待つてゐた其の場の様子は今夜と少しも變りがない。變つたのは自分の心持ばかり。その時分恐しかつたり珍しかつたりした事は、もう馴れた上にも馴れきつて、何とも思はなくなつてしまつた。

「君さん。何かたべるか。もう支那蕎麥ぐらゐしか出来ないときさ。」

矢田の聲に君江は振り返ると、洋服を浴衣にきかへ、立つてしごきを結びかけてゐる。

「わたし、ほしくないわ。」と君江も一重羽織の紐を解きかけた。

女中は矢田の洋服を入れた亂箱を片隅に運び、「今夜はどこもふさがつて居りますから、お狭いでせうけれど、こゝで、どうぞ。」と床の間につゞいた。君江の眼にはいよいよ取出したので、二人は再び濡縁に腰をかけて庭の方を向いた。

きまつてゐる。それも大抵カッフエーに居る間から豫め知れてゐることで、今日のやうな早出の朝、不意に尋ねて来ることは滅多にない。君江は昨夜のことが知れたのではないか。それにしては知れ方が早過ると、心の中では随分あわてながら、何喰はぬ顔で勢よく、

「お早いことねえ。まだ散らかしたままなのよ。」と梯子段を降りて行くと、清岡は丁度靴をぬいで上つたばかり。戸口を掃いてゐた小母さんも抜目のない狸婆と見えて、

「君江さん。おいやでも、もう一度をばさんの薬を上つてお出かけなさいませよ。昨夜はほんとにびつくりしました。」

君江はそれに力を得て、「もう大丈夫よ。きつと食合せがわるかつたのねえ。」

「どうかしたのか。お腹でも下したのか。」と言ひながら清岡は二階へ上つて、窓へ腰をかけた。

二階は六疊に三疊の二間つゞきであるが、前桐の安箆筒と化粧鏡と盆に載せた茶器の外には殆ど何物もない。箆筒の上にも何一ツこまぐくした物も載せられてゐないので、二階中はいかにもがらんとして古疊と鼠壁のよごれが一際目に立つばかり。座布團も色のさめたメリンスの汚點だらけになつたのが一枚、鏡臺の前に置いてゐる外には、木綿麻の随分古ぼけた夏物が二枚壁際に投出されてゐるばかりである。君江はいつものやうに鏡臺の前の座布團を裏返しにして清岡にすゝめると、清岡はそれを窓の敷居の上に載せ、ズボンの折目を氣にしながら再び腰をかけた。窓の下はコイルタの剥げたトタン葺の平屋根で、二階から捨てる白粉や齒磨の水の痕ばかりか、毎日掃出す塵ほこりに絲屑や紙屑もまざつてゐる。此の汚らしい屋根の彼方は士官學校門前の通りに立つてゐる二階家の裏側で、汚い洗濯物や古毛布や赤兒のおしめが干してある間から、絶えずミシンの音やら印刷機の響が聞える。これと共に士官學校の構内で生徒の練習する號令の聲、軍歌の聲、喇叭の響のみならず、晝

の中は馬場の砂煙が折々風の吹きぐあひで灰のやうに飛んで来て疊の上のみならず襖をしめた押入の内までじやり／＼させる事がある。清岡は丁度去年の今頃、初めて君江に導かれてこの貸間に立寄つた時から、もう少しあたりの清潔な居心地の好い處へ引越したらばと勧めてゐたが、君江は唯口先でばかり同意しながら、その實今日まで更に引越さうとする様子もなく、家具も一年前と同じで、その後新に湯呑一つ買つた事もないらしい。金には決して不自由してゐないのに、机も衣桁もなく、電氣の笠もかけたまゝで、いつまでたつても、今方引越して来たばかりだといふ體裁である。君江は年頃の女のやうに、窓に草花の鉢を置いたり、箆笥の上に人形や玩具を飾り立てたり、壁に繪葉書を貼つたりするやうな趣味は全然持つてゐない。兎に角一風變つた妙な女だと清岡は早くから心付いてゐた。

「お茶はいらぬ。もうそろ／＼出掛ける時分だらう。」と清岡は窓から座布団と共に腰をすべらせて疊の上に胡坐をかき、

「僕もこれから新宿の驛まで用事があるんだよ。それでちよいと寄つて見たんだ。」

「さう。でも、お茶だけ入れませうよ。をばさん。お湯がわいてゐるなら頂戴。」と叫びながら下へ降り、すぐに瀬戸引の薬罐を提げて来た。

「昨日、お前、占を見てもらひに行つたんだつてね。街巷新聞に出た黒子の一件は、誰がいたづらをしたのか當がついたか。」

「いゝえ。當も何もつかないわ。」と君江は久須の茶を湯呑につきながら、「初めは、いろ／＼な事をきいて見やうと思つて出かけて見たんだけど、何だか氣まりがわるいから止してしまつたのよ。だけれど、考へるとほんとに不思議ねえ。誰も知つてゐる筈がない事なんですもの。」

「占ひでわからなければ、今度は巫女か、お先狐にでも見してもらふんだな。」

「巫女つて何。」

「知らないのか、よく藝者なんぞが見てもらふぢやないか。」

「わたし、占者だつて全く昨日が始めてぐすもの。何だか馬鹿々々しいやうな気がするから、あゝ云ふ事はわたしには駄目よ。」

「だから、氣にしない方がいゝつて僕は最初からさう言つてるぢやないか。」

「でもあんまり不思議なんでももの。知れやう筈のない事が知れたんでももの。まったく不思議だわ。」

「自分ばかり知れないと思つてゐても、世の中には案外な事があるからね。秘密は却て漏れやすいものさ。」と言ひ終つて清岡は自分から言過ぎたと心付き、急いで煙草を啣へながら君江の顔色を窺ふと、君江の方でも何か言はうとしたのを其のまゝ黙つて、飲みかけた湯呑を口の端に持ち添へたまゝ、ぢろりと清岡の顔を見たので、二人の目はびつたり出遇つた。清岡は煙草の烟にむせた風をして顔を外向け、

「何でも氣にしないのが一番いゝよ。」

「ほんとうねえ。」と君江の方でも心からさう思つてゐるらしく見せかけるために、

聲まで作つたが、それなり後の言葉が出て來ないので、湯呑の茶をゆつくり飲干して静に下に置いた。君江は昨夜矢田と神樂坂へ泊つた事は知られてゐないにしても、何しろ二年越しの間柄なので、何事に限らず大抵の事は清岡には知られてゐると思つてゐるが、さてどの邊まで知られてゐるか、それは君江にも當がつかない。君江は何か好い折があつたら、清岡とは關係を斷つてさつぱりとして、自分の過去の事を少しも知らない新しい戀人を得たいといふ氣にもなつてゐる。君江はどういふ譯だか、自分の平生を人に知られてゐる事を好まない。秘密にする必要がない事でも、君江は人に問はれると、唯にやゝ笑ひにまぎらすか、さうでなければ口から出まかせな虚言をつく。最親しい筈の親兄弟に對しては君江が一番よそよしく決して本心を明した事がない。自分の方から好きだと思ふ男に對しては猶更の事で、その男が何か深く聞知らうとすればいよゝ堅く口を閉ぢて何事をも語らない。同じ店につとめてゐるカツフェーの女給連は、君江さんほど姿の優しいとやかな人

はないが、不斷何を考へてゐるのやらあれほど譯のわからない人もないと言はれてゐるのである。

清岡が君江を識つたのは君江が始めて下谷池の端のサロン・ラックといふ酒場の女給になつた其の第一日の晩からであつた。清岡は始めて君江を見た時、女給をした事がないといふならば、どこかで藝者をしてゐた女だらうと想像した。容貌はまづ十人並で、これと目に立つ處はない。額は圓く、眉も薄く眼も細く、横から見ると随分しやくれた中低の顔であるが、富士額の生際が髪をつけたやうに鮮かで、下唇の出た口元に言はれぬ愛嬌があつて、物言ふ時齒並の好い、瓢の種のやうな齒の間から、舌の先を動かすのが一際愛くるしく見られた。此の外には色の白いのと、撫肩のすらりとした後姿が美點の中の第一であらう。清岡は其晩、君江が物言ひのしづかなのと、舉動の疎暴でないのを殊更うれしく思つて、纏頭は拾圓奮發して其の歸途をそつと外で待つてゐた。それとは心づかない君江は廣小路の四辻まで歩い

て早稲田行の電車に乗り、江戸川端で乗換へ、更に亦飯田橋で乗換へやうとした時は既に赤電車の出た後であつた。清岡は自動車でこゝまで跡をつけて來たので、そつと車を降り、偶然再會したやうな振りで話をしかけた。君江は問はれてもはつきり住處は知らせなかつたが、唯市ヶ谷邊だと答へて、一緒に外濠を逢阪下あたりまで歩いて行く中、どうやら男の言ふまゝになつてもいゝやうな素振を示した。君江は其の頃、久しく一緒に住んで共に××をしてゐた京子といふ女が、いよゝ小石川諏訪町の家をたゝんで富士見町の藝者家に住込む事になつたので、泣きの涙で別れ、獨り市ヶ谷本村町の貸二階へ引移り、×××××へ出入する事をよしてゐたので、一月あまりの間一晩も×××××の折がなかつた。夜ふけてから外へ出た事さへ稀だつたので、此夜久しぶり靜にふけ渡つた濠端の景色を見てさへ、何とも知れず心の浮き立つ折から、時候も丁度五月の初めで、袷の袖口や裾前から靜に夜風の肌を撫でる心持。君江は清岡の事を少壯の大學教授か何かだらうと、始めからわる

く思つてゐなかつたので、飛び立つやうな嬉しさをわざと押隠し、誘はれるがまゝ、
 氣まりのわるい風をしながら、其夜は四谷荒木町の××へ連れられて行つた。君江
 は新に好きな男ができると忽ち熱くなつて忽ち冷めてしまふといふ、生れついで
 の浮氣者なので、翌日も夕方近くまで××××××のいがいやさにカッ
 フェーもそれなり休んで、井の頭公園××××××に行き次の××××××に明して三日の
 後市ヶ谷の貸間まで一緒に来てやつとわかれた。清岡は丁度其の頃、一時妾にしてゐ
 た映畫女優の玲子とやらを人に奪はれ、代りの女を物色してゐた矢先、君江が身も
 心も捧げ盡したやうな濃厚な態度に、すつかり迷ひ込み、どんな贅澤な生活でも望
 む通りにさせてやるから、女給をやめるやうにと勧めたが、君江は將來自分でカッ
 フェーを出したいから、もう暫く女給をしてゐたいと言つたので、それならば本場
 の銀座へ出て經驗をした方がよいと、池ノ端のサロンは一個月あまりで止めさせ、
 半月ばかり京阪を連れ歩いた後、清岡は人を介して、銀座では屈指のカッフェーに

數へられてゐる現在のドン・ファンに君江を周旋した。間もなく入梅があけて夏に
 なり、土用の半からそろ／＼秋風の立ち初める頃まで、清岡は何一つ疑ふ所もなく、
 心から君江に愛されるものとはばかり思込んでゐた。ところが或夜二三の文學者と
 芝居の歸り、銀座に立寄つて見ると、君江は急に心持がわるくなつたと言つて夕方
 から店を休んだといふ事を、他の女給から聞き、友達にわかれてから、一人本村町
 の貸間へ病氣見舞ひに行かうとした時、いつも曲る濠端の横町から、突と現はれ出
 た女の姿を見た。まだ十二時前ではあつたが、片側町の人家は既に戸を閉め、人通
 りも電車も杜絶えがちになつた往來には圓タクが馳過るばかり。清岡は四五間此方
 から、白つばい縮縮緬の着物と青竹の模様夏帯とで、すぐそれと見さだめ、怪訝
 のあまり、車道を横断して土手際の歩道を行きながら女の跡をつけた。君江はスタ
 スタ交番の前をも平氣で歩み過るので、市ヶ谷の電車停留場で電車でも待つのかと
 思ひの外、八幡の鳥居を入つて振り返りもせず左手の女阪を上つて行つた。いよ／＼

だらう。」

「毎日晝間からお座敷があるんですつて。この間鳥渡尋ねたのよ。だけれどろくろく話をしてゐる暇もなかつたのよ。あなた。これから寄つて見ない。居なかつたら居なかつたで、別にかまやアしないから。」

「うむ。久しぶり、三人で夜明しするのも面白い。諏訪町の二階では實にいろ／＼な事をしたね。兎に角お前と京子とは實にいゝ相棒だよ。僕は晝間眞面目な仕事をしてゐる最中でも、ふいと妙な事を考へ出すと、すぐにお前の事を思出す。それから京子の事を思出して、夢でも見てゐるやうな心持になるんだ。」

「それでも京子さんに較べれば、わたしの方がまだ健全だわねえ。」

「どつちとも云へない。お前の方が見かけが素人らしく見えるだけ罪が深いよ。カツフェーへ行つてから別に變つたのも出来ないかね。西洋人はどうだ。」

「銀座はあんまり評判になり過るから、さう思ふやうにはやれないわ。そこへ行く

と藝者の方が大びらで、面倒臭くなくつていゝわ。諏訪町に居る時分はほんとに面白かつたわね。」

「旦那はあれつきりか。まだ出て來ないのか。」

「さうでせう。其後別に話が出ないから、どの道もう關係はないんでせう。それにもと／＼京子さんの方ちや、借金を返して貰つた義理があるだけで、別に何とも思つてゐた譯ぢやないんだから。」

「今度は何て言つてゐる。矢張京子といふのか。」

「いゝえ。京葉さんといふのよ。」

二人は夜ふけの風の涼しさと堀端のさびしさを好い事に戯れながら歩いて新見附を曲り、一口坂の電車通りから、三番町の横町に折れて、軒燈に桐花家とかいた藝者家の門口に立寄つた。夏の夜の事で、その邊の藝者家ではいづれもまだ戸を明けたまゝ、藝者は門口の涼臺に腰をかけて話をしてゐるのを、男はなれ／＼しく、

「京葉さんはゐますか。」ときくと、直に家の内から、小ぶくりの圓顔。髪はつぶしにたけながを結んだ女が腰の物一枚、裸體のまゝ上框へ出て来て、

「あら、御一緒。まあうれしいわね。わたし今歸つて来たところ。丁度よかつたわ。」

「どこかい、家を教へろよ。ゆつくり話をするから。」

「さうねえ。それぢやア……。」と裸體の女は行先を男に囁くと、二人はそのまゝ歩いて四ツ角をまがる。

こゝまで跡をつけて来て路地のかげに身をひそめてゐた清岡は、萬事があまりに都合好く進捗して行くので、此のまゝ中途から歸るわけには行かなくなつた。頃合ひを計つて、清岡は君江のつれられて行つた同じ待合へと、振りの客になり濟まして上り込み、女中には勘定を先に拂つて、成りたけおとなしい若い藝者をと云付け、素知らぬ振りで寢てしまつた。そして彼の見知らぬ老人が君江と京葉の二人を相手

の遊びざまを思ひ残りなく窺つた後、翌日の朝はまだ日の照らぬ中清岡はそつと其の待合を出た。然し赤坂の家へ歸るには時間が少し早過るので、已むことを得ず四番町の土手公園を歩みベンチに腰をかけて、ぼんやりとして堀向うの高臺を眺めた。清岡は三十六歳のその日まで、夢にも見なかつた事實を目撃し、これまで考へてゐた女性觀の全然誤つてゐた事を知つて、嫉妬の怒りを發する力もなく、唯わけもなく鬱ぎ込んでしまつた。清岡はその日まで、獨り君江に限らず世間の若い女が五十六十の老人に身を寄せて平氣であるのは、戀愛と性慾との不満足を忍んで只管生活の安定を得やうがためとばかり思込んでゐたのであるが、豈圖らんや。事實は決してさうでない。自分ばかりを愛してゐると思つてゐた君江の如きは、事もあらうに淫卑な安藝者と醜惡な老爺と、×××××して慚る處を知らない。清岡は自分の經驗と觀察とのいかに淺薄であつたかを知ると共に、君江に對しては言ふに言はれぬ憎惡の念を覺え、此のまゝもう二度と顔は見まいと思つた。然し其の日家へ歸

つてから一寝入りして目をさますと、一時激昂した心も大分おちついてゐる。それと共に此儘何事も知らぬ顔に済してしまふのは、あまり言甲斐がなさ過ぎる。面責した上、女の口から事實を白状させてあやまらせねば、どうも氣がすまない。然しまた更に思直して見ると、君江は見掛けに似ず並大抵の女でない。問はれるまゝに案外無造作に白状してしまふかも知れない。それと共に自分の遊び足りない事と嫉妬を起した事などを心窃に冷笑しないとも限らない。これは男の身に取つては浮氣をされたよりも、猶更忍びがたい侮辱である。清岡は黙殺するのも無念だし、表面は謝罪つて、陰で舌を出されるのは猶更口惜しいと、さまざま、思索した末、矢張何事をも知らぬ振りで表面は今迄通り、飽くまで馬鹿にされながら、其代りいつか時節を待つて、痛烈な復讐をしてやるに若くはないと決心した。

清岡は多年原稿生活を営む必要上、腹心の男を二人使つてゐる。一人は村岡といつて、早稻田あたりを卒業したばかりの文士で、毎月百圓内外の手當を貰ひ、清岡

の口述する小説を筆記して原稿を製作すると、それを駒田といふ五十年輩の男が新聞社や雑誌社へ賣込みに行く。駒田は多年或新聞社の會計部に雇はれてゐたので、原稿料の相場にも明く又記者仲間にも知己が多いので、清岡の受取るべき稿料の二割を自分の取得にする約束で働いて居るのである。清岡は門人同様の村岡に命じて、君江が歌舞伎座へ見物に行つた歸途、安全剃刀の刃で着物の袂を切らせた。尤も其の衣類は清岡が買つてやつたものである。暫くしてから清岡はこれも三越で自分が買つてやつた眞珠入の櫛を、一緒に自動車に乗つた時、その降り際にそつと抜き取つて見た。君江はきつと泣いて騒ぐだらうと思ひの外、さして氣にも留めないらしく、清岡にも又間貸しのをばさんにも別にそんな話さへしない様子であつた。

君江は極めてじだらくで、物の始末をしたことのない、不經濟な女である代り、着物もそれほど着たがらない事は清岡も不斷から心づいてはゐたものゝ、かくまで無頓着だとは思つてゐなかつた。そこで、留守の中に窃と猫の兒の死骸を押入の中

に投込んで様子を見たが、これさへ左程恐怖の種にはならなかつたらしいので、遂に清岡はわるくすると感付かれるかも知れぬと危ぶみながら、君江が内股の黒子の事を、村岡に云付けて街巷新聞に投書させたのであつた。これは大分君江の心を不安にさせたらしいので、清岡は内心それ見ると幾分か胸のすくやうな心地がした。然し一度目が覺めた後、君江の生活を探偵して見るといよ／＼腹の立つ事ばかりなので、報復の手段も唯一時の悪戯ではなかく、氣がすまないやうになる。もつと激烈な痛苦を肉體と精神とに加へてやる機会を窺ふため、清岡は十分相手に油断をさせ、此方の胸中を悟られぬやう、以前にも増して飽くまで惚れ込んでゐるやうな様子を示すやうにしてゐたが、平常心の底に蟠つてゐる怨恨は折々われ知らず言葉の端にも現はれさうになるのを、清岡は非常な努力で之を押えてゐなければならぬ。今方占者のはなしから、清岡は我知らず言過ぎたと心付き狼狽へて言ひまざらしたのも、實はかういふ事情からである。このまゝ長く向ひ合つて二階に居るのは

よくないと心づいて、腕時計を見ながら、いかにも驚いたやうに、「もう十時半だ。そこまで一緒に出かけやう。」

君江の方でも昨夜泊つたまゝ、まだ湯にさへ入らぬ身のまはりを見廻はされるのが、何となく辛くてならないので、何は兎もあれ一まづ外へ出るに如くはないと考へ、

「えゝ。少し歩きませう。お天氣が好いと店へ行くのがいやになるわ。一日、目の目を見ずにあるんだから。」とぬぎ捨て、あつた堅しぼの一重羽織を引掛けて、窓の障子をしめた。

「今日十一時だと明日は五時出だね。」

「えゝ。だから、今夜店へいらつしてよ。何處かゆつくり遊びに行きたいわ。いでせう。」

「さうだな。」と男は曖昧な返事をしながら帽子を取つた。

「ねえ、遊びに行きませうよ。どの道今夜はゆつくり遊ぶ日ぢやないの。」と君江は既に梯子段の降口に出た清岡の身に寄添ひ、接吻してと言はぬばかりに顔を近寄せ、睫毛の長い目を軽くふさいだ。

清岡は憎い仕方だとは思ひながら、もと／＼嫌ひではない女のいかにも艶しく情を含んだ姿を見ると、其の瞬間はさすがに日頃の怒りも何處へやら消え去つて、生れつき賣笑婦にでき上つてゐる斯ういふ女に對して、道徳上兎や角非難するのは或は過酷かも知れない。男の劣情を挑發する一種の器械だと思へば、自分の見ない處で何をしてゐても更に咎むべき事ではない。弄ぶだけ弄んで隨意に捨て、しまへばそれでよいのだと云ふやうな心持にもなる。忽ち進んで、それにしても此の女がもすこし自分の心を汲み分け、其の身を慎しんで、自分の専有物になつてくれ、ばといふ慾望が次第に強くなつて来る。清岡は横を向いてさり氣なく、「兎に角夜になつたら銀座で逢はう。其時にきめやう。」

「え、さうして頂戴」と君江は急に明い顔になつて一足先にばた／＼と下へ降り、をばさんの手から雑巾を奪ひ取つて、手づから清岡の靴を拭いた。

市ヶ谷の堀端へ出る横町は人目に立つので、二人は露地から露地を抜けて士官學校の門前を出で比丘尼坂を上つて本村町の堀端を四谷見附の方へ歩いた。晝前のこととて、二人は並びながらも少し離れて話もせず、君江は日傘に顔をかくしてゐたが、ふと此の堀端は昨夜十二時過電車を降りてから矢田と手を引合つて歩いた同じ道だと思ふと、夜と晝との相違から、君江はどうして昨夜はあんな矢田のやうな碌でもない男の言ふ事をきく氣になつたのだらうと、自分ながら其の腑甲斐なさに厭な心持がした。清岡さんがそれと知つたらどんなに怒ることだらうと、日傘のかげからそつと男の横顔を窺ふと、少しは氣が咎めもするし、又いかにも氣の毒でならないやうな心持もして、此れからはカツフェーの歸り道には成りたけ慎しんで其場かぎりの浮氣は起すまいといふ氣にもなる。せめての申譯といふではないが、何やら急

に清岡の事が戀しくなつて、君江は歩きながら突と摺寄つて人通りをもかまはず其の手を握つた。

清岡は君江が石にでも躓いて、そのために急に自分の手を握つたとても思つたらしく、「どうしたんだ。」と言ひながら、往來の人目を避けて溝際の方へ少し身を避け

た。「わたし、今日どうしても休みたいの。電話で斷るわ。いゝでせう。」

「斷つてどうするんだ。」

「あなたの御用がすむまで、わたしどこかで待つてゐるわ。」

「夜になれば會へるんだから、休むにも及ばないぢやないか。」

「だつて、わたし何だか急になまけたくなつちまつたのよ。でも、あなたの御用の邪魔をしちやアわるいわねえ。」

清岡はもとく用事があるのではない。君江の様子を窺ひに不意と出て來たので

此の場合振切つて別れたなら、浮氣な君江の事だから、今夜自分の行くまでに何をしだすか知れないと、つまらない事が妙に氣になり出した。

君江の方では此の年月いろく男をあやなした經驗で、かういふ場合には男がすこしは持て餘すほど我儘を言つた方が却て結果の好い事を知つてゐる。それに又先刻占ひのはなしから清岡の言つた事が何となく氣にかゝつてならぬ矢先、夜になるのを待たず一刻も早く男の心の打解けるやうな方法を取らなくてはならないと考へたのである。これも度々の實驗で、君江は男がどんなに怒つてゐても結局其場に至れば譯もなく惱殺する事ができるものと、飽くまで自分の魔力に信賴して安心してゐる所がある。魔力といふのは、生れつき君江の肌には一種の溫度と體臭とがあつて、別に技巧を弄せずとも一度之に××××は終生忘れることの出来ない××××を覺えるといふ事である。君江はこれまで一人ならず二人ならず、さまざま男からお前はほんとの妖婦だなど、言はれて、自分の身體はそんなにまで男に強い刺撃を



與へるものかと、次第に自覺した後熟練を積み、今では自分ながら深く信ずる所があるやうになつて居る。

四谷驛の降り口近くまで歩いて来た時、君江は急に悲しいやうな遺瀨のないやうな表情を見せて、「ぢや、わたし、あんまり我儘をいふとわるいから、こゝから圓タクで行きますわ。」

「うむ。」とそつ氣なく言つたが、清岡は君江の遺瀨なげな様子に氣がつくと、其の瞬間どうしたのか、昨日今日新に得た戀人と別れるやうな、何とも知れぬ残り惜しい心持になつた。君江はわざとぼんやり清岡の顔を見詰めたまゝ、日傘の尖で砂利を突きながら立ちすくんでゐる。

清岡は何も彼も忘れて寄り添ひ、「いゝよ。休んでしまへ。どこでもいゝ。一緒に行かう。」

「あなた。ほんとウ。」と君江は巧に睫毛の長い眼の中をうるませて徐に俯向いた。

五

府下世田ヶ谷町松蔭神社の鳥居前で道路が丁字形に分れてゐる。分れた路を一二町ほど行くと、茶島を前にして勝園寺といふ匾額をかゝげた朱塗の門が立つてゐる。路はその邊から阪になり、遙に豪徳寺裏手の杉林と竹藪とを田と畠との彼方に見渡す眺望。世田ヶ谷の町中でもまづこの邊が昔のまゝの郊外らしく思はれる最幽靜な處であらう。寺の門前には茶島を隔て、西洋風の住宅がセメントの門塙をつらねてゐるが、阪を下ると茅葺屋根の農家が四五軒、いづれも同じやうな藪垣を結びめぐらしてゐる間に、場所柄からこれは植木屋かとも思はれて、摺鉢を伏せた栗の門柱に引違ひの戸を建て、新樹の茂りに家の屋根も外からは見えない奥深い一構がある。清岡寓と門の柱に表札が打付けてあるが、それも雨に汚れて明かに讀み得ない。小説家清岡進の老父熙の隱宅である。

初夏の日かげは眞直に門内なる栗や棟の梢に照渡つてゐるので、垣外の路に横たはる若葉の影もまだ短く縮んでゐて、鶏の聲のみ勇ましくあちこちに聞える眞晝時。ちみな焦茶の日傘をつぼめて、年の頃は三十近い奥様らしい品のい、婦人が門の戸を明けて内に這入つた。髪は無造作に首筋へ落ちかゝるやうに結び、井の字紺の金紗の袷に、黒一ツ紋の夏羽織。白い肩掛を引掛けた丈のすらりとした瘦立の姿は、頸の長い目鼻立の鮮な色白の細面と相俟つて、いかにも淋し氣に沈着いた様子である。携へてゐた風呂敷包を持替へて、門の戸をしめると、日の照りつけた路端とはちがつて、静な夏樹の蔭から流れて來る微風に、婦人は吹き亂されるおくれ毛を撫でながら、暫しあたりを見廻した。

麥門冬に縁を取つた門内の小徑を中にして片側には梅、栗、柿、棗などの果樹が鬱然と生茂り、片側には孟宗竹が林をなしてゐる間から、其の筍が勢よく伸びて眞青な若竹になりかけ、古い竹の枝から細い葉がひらく、絶間なく飛び散つてゐ

る。栗の木には強い匂の花が咲き、柿の若葉は楓にも優つて今が丁度新緑の最も軟かな色を示した時である。樹々の梢から漏れ落ちる日の光が厚い苔の上にきらりと揺れ動くにつれて、静な風の聲は近いところに水の流でもあるやうな響を傳へ、何やら知らぬ小禽の囀りは秋晴の且に聞く鳴よりも一層勢が好い。

婦人は小禽の聲に小砂利を踏む足音にも自然と氣をつけ、小徑に従つて斜に竹林を廻り、此方からは見通されぬ處に立つてゐる古びた平家の玄關前に佇立んだ。玄關には磨硝子の格子戸が引いてあるが、これは後から取付けたものらしく、家はさながら古寺の庫裏かと思はれる程いかにも堅牢に見える。然し其の太い柱と土臺には根繼をした痕があつて、屋根の瓦は苔で青く染められてゐる。玄關側の高い窓が開放しになつてゐたが、寂とした家の内からは何の物音も聞えない。窓の下から黄楊とドウダンとを植交へた生垣が立つてゐて、庭の方を遮つてゐるが、さし込む日の光に芍薬の花の紅白入れ亂れて咲き揃つたのが一際引立つて見えながら、こゝも

亦寂としてゐて、花缺の音も箒の音もしない。唯勝手口につゞく軒先の葡萄棚に、今がその花の咲く頃と見えて、虻の羣れあつまつて唸る聲が獨り夏の日の永いことを知らせてゐるばかりである。

「御免下さい。」と肩掛を取りながら、靜に格子戸を明けると寂とした奥の間から、「どなたぢや。」といふ聲がして、すぐさま襖を明けたのは、眞白な眉毛の上に老眼鏡を釣し上げた主人の熙であつた。

「鶴子か。さアお上んなさい。今日は婆やお墓参り。傳助も東京へ使にやつて誰も居らん。」

「それぢや、丁度よう御在ました。代りに何か御用をいたしませう。」と婦人は包をもつたまま、老人の後について縁側づたひに敷居際に坐り、

「もう蟲干をなさいますの。」

「いつと云ふ事はない。手がなから氣の向いた時、年中やるよ。年寄りの運動に

は一番いゝ。」

縁側の半程から奥の八疊の間に書帙や書畫帖などが曝してある。障子も襖も明け放してあるので、揚羽の蝶が座敷の中に飛込んで来て、やがてまた庭の方へ飛んで行く。鶴子は風呂敷包を膝の上にほどいて、

「先日のお召物を仕立直してまゐりました。あちらへ置いてまゐりませう。ついでにお茶でも入れてまゐりませうか。」

「さう。一杯貰ひませう。茶の間に到來物の羊羹か何かやつたと思ふが、ついでに一寸見て下さい。」と老人は鶴子が座を立つのを見て縁側に曝した古書を一冊々々片づけはじめた。五分刈の頭髮は太い眉毛や口髭と共に雪のやうに白くなつてゐる。で、血色のいゝ顔色は猶更赧らみ、瘦せた小づくりの身體は年と共にますます嬰鑠としてゐるやうに見える。やがて鶴子が番茶と菓子とを持つて來たのを見て、老人は其のまゝ縁先に腰をかけ、

「暫く見えんから風邪でも引いたのかと思つてゐた。市中では今だにインフルエンザがはやるさうだな。」

「お父さまは去年からお風邪一つお引きになりませんのね。」

「今の若い者とは少し訓練がちがふからな。は、は、は。その代りふだん丈夫なものはころりと行くからな。當てにはならん。」

「アラそんな事をおつしやるもんぢや有りません。」

「むかしから頼みにならない事を、君寵頼み難し。老健頼み難しなど、云ふぢやないか。は、は、は。進は相變らず達者か。」

「はい。おかげさまで。」

「その中一寸逢ひたいと思ふ事があるのだ。實は此の間偶然電車の中でお宅の御兄さんにお目にかゝつてな……。」と老人は言ひかけて咳嗽をしながら眼鏡越しに鶴子の顔を見た。鶴子は却てさり氣なく、

「何か、わたくしの話が出ましたの。」

「さうだ。わるい話ではない。お前の戸籍をこの後どうして置くかといふはなしさ。成りはじめの事はもう兎や角言つた處で仕様のない事だからな。成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めずといふ教もあるから、わしはいづれにしても異存はないと申上げて置いた。お前の家とわしとが承知なら、進は無論何とも言ふ筈はないわけだから、どうだね。早くその手續をしてしまつたら。届書は區役所の代書にたのめばすぐ出来るから、印さへ押せばそれでいゝのだよ。」

「はい。歸りましたら早速さう申します。」

「戸籍などはどうでもいゝやうなものだが、然し人倫の道は正しいに越した事はない。幾年も夫婦同様にしてゐれば結局籍を入れるのがあたり前のはなしだからな。最初の事は能く知らむが、お宅のはなしではもう五年になるさうだな。」

「はい。たしか。」と鶴子はわざと言葉を濁して伏目になつた。今更指を折つて數へ

て見るまでもなく、鶴子は五年前、年齢は二十三の秋、前の夫が陸軍大學を出て西洋へ留學中、輕井澤のホテルで清岡進と道ならぬ戀に陥つたのである。先夫の家は子爵で、別に資産はなかつたが、兎に角舊華族の家柄なので、世間の耳目を憚り親族は夫の歸朝を待たず多病と云ひなして鶴子を離別した。鶴子の家には其時既に両親がなく、惣領の兄が實業界では相應に名を知られてゐたところから、衣食に窮しないだけの資産を鶴子に與へて生涯實家や親類の家へ出入する事を禁じた。その時分進はまだ駒込千駄木町に在つた老父熙の家にて、文學好きの青年等と同人雜誌を刊行してゐたのであるが、鶴子が離別されると間もなく父の家を去つて録倉に新家庭をつくつた。半年ほどたつた時老父の熙は突然流行感冒で老妻を先立たせ、又文官年限令で帝國大學教授の職を免せられたので、之を機會に千駄木の家を人に貸して、以前から別荘にしてあつた世田ヶ谷の廢屋に棲遲した。

世田ヶ谷の家には十年程前まで、八十歳で世を去つた熙の父玄齋が隱居してゐた。

玄齋は維新前駒場に在つた徳川幕府の藥園に務めてゐた本草の學者で、著述もあり、専門家の間には名を知られてゐたので、維新後屢出仕を勧められたが節義を守つて此の村莊に餘生を送つた。今日庭内に繁茂してゐる草木は皆玄齋が遺愛の形見である。

熙は初め中村敬宇の同人社に入り後に佐藤牧山と信夫恕軒との二家について學を修め、帝國大學を卒業後は直に助教に擧げられ、老免せられるまで凡三十年漢文の講座を擔任してゐたのであるが、深く時勢に感ずる所があつたと見えて、平素學生に向つては、今の世の中に漢文學の如き死文字を學ぶ程愚な事はない。唯骨董として之を好むものが弄んでゐればよいものだど稱して、人に意見をきかれても笑つて答へず。同僚の教授連とは深くは交らず、唯自家の好む所に従つて専ら老莊の學を研究し、著書も少くはないのであるが、一として世に示したものはない。熙は其子の進が人妻と密通して世間を憚らず一家を構へたのを知つて、深く憤りはした

ものゝ、現代の青年男女は老人の訓戒などに耳を借す筈がないと、あきらめ切つてゐるので、表面は何事も知らぬ振り、實は義絶したのも同様、世田ヶ谷に隠居してから三年ばかりの間は一度も音信をしたことさへなかつた。進の方でも父が平生の氣質から其の憤りを察して、之に反抗するため、わざと其れなりに月日を過してゐた。ところが老人は亡妻の命日に駒込の吉祥寺に往つた時、一人の若い女が墓前に花を手向けてゐるのを見て、不審のあまり、丁度狭い垣根の内のことで、女の方から氣まわりわるさうに辭儀をするまゝ、其名をきいて始めて其の女が伴の妻の鶴子である事を知つたのである。老人は進の如き乖戾な男と好んで苦樂を偕にしてゐるやうな女が、言はゞ其の姑に當るものゝ忌日を知つて墓參りをするは、そもゝゝどうした譯であらう。そんな譯のあらう筈がない。年寄の耳の聞まちがへではないかといふ氣もしたので、墓地の小徑を並んで歩む折重ねてその名をきゝ直した。それが話の糸口になつて、寺の門を出てから電車に乗つて別れる時まで知らずゝ話

をしつゞけた。老人は平素現代の青年男女には道德の觀念は微塵もない。男は大抵乖戾放慢の徒で、女はまづ禽獸と大差なきものと思込んでゐる矢先、鶴子の言葉使ひや舉動のしとやかな事がまゝゝ不思議に思はれ、更に又、これ程禮節をもわきまへてゐる女がどうして姦通の罪を犯したのであらうと、家へ歸つた後も頻に心を勞した末、ふと老人は鶴子が操を破つたのは或る放蕩無頼な倅に欺かれた爲ではないかといふ氣がした。果してさうだとすると、實に氣の毒な事だ。何となく親の身として申譯のないやうな心持がして來るので、その後老人は圖らず新宿の停車場で出會つた時は此方から呼びかけたくらゐであつた。それ等の事から、鶴子はいつともなく世田ヶ谷の隱宅へ出入することを許されるやうになつたのであるが、然し進との間柄については、二人とも何やら互に遠慮して、問ひもせず言ひもせず、そのまゝになつてゐる。生計の事では其後進は莫大な收入がある身となつてゐるし、老人の質素な生活は恩給だけでも有り餘る程なので、互に家事向の話の出べき所がな

いわけであつた。

世田ヶ谷の家には庭掃除の下男と雇婆が居るもの、鶴子は老人が日々の食事を始め衣類や身のまはりの事に不自由してゐるらしいのを見て、それとなく陰へ廻つて氣のつくかぎり世話をするやうになつた。表向きお世話をするとはいへば老人はきつとそれには及ばないと言ふにちがひはない。且又、清岡の家には既に或醫學博士に嫁した姉嬢もあるので、鶴子はその手前をも憚つて、何事も目に立たないやうにひかへ目にしてゐる。その態度や心持は月日と共にのおのづから老人の眼にもわかるやうになつたので、老人はいよく鶴子の胸中を氣の毒に思ひ、心竊に倅進の如きもの、妻には寧ろ過ぎたものと感服しなければならぬやうになつた。

老人は茶を飲み干した茶碗を膝の上に握りながら、「その中お宅へ伺つてお話を伺はうと思つてゐるのだがね、年をとると、つい袴をはくのが面倒でな。さうかと云つて、初めて伺うのに着流ではあまり失禮だし、何か好い折がと思つてゐるのだが、

お前はその後やはり出入りはせんのかね。」

「はい。そのまゝになつて居ります。兄ばかりなら却て遠慮が御在ませんけれど、義姉の手前も御在ますから。」

「それは大きにさうかも知れない。」

「兎に角わたくしが悪いのにちがひは御在ませんのですから、別にどなたの事もお怨み申しては居りません。」

「その心持があればもう立派なものだ。」と言つた時、曬した古法帖の上に大きな馬蠅が飛んで來たので、老人は立つて追ひながら、「過を改むるに憚ること勿れ。若い時の事はどうもいたし方がない。人間の善悪は寧晩節に在るのだよ。」

鶴子は何か言はうとしたが、自分ながら聲が顫へはせぬかと思つて其のまゝ俯向くと、胸が急に一杯になつて來て、どうやら眼が潤んで來るやうな心持がした。折よく勝手の方に人の聲がしたのを聞付けて、これ幸とあわて、坐を立つた。老人

は馬蠅の飛び去る方を睨みながら、「酒屋か郵便屋だらう。うつちやつてお置きなさい。」と徐に石摺の古法帖を疊んだ。

鶴子は涙を見せまいと臺所へ行つて見ると、老人の言つた通り、酒屋の男が醬油の壘を置いて立去るところであつた。勝手口は葡萄棚のかげになつて日の光を和げられ、竹藪の間から流れて来る風はひやりとする程爽かである。女中部屋は雇婆が出がけに掃除をして行つたものと見え、火鉢の灰もならしたまゝ、綺麗に片づいてゐる。鶴子は酒屋の男の去つた後あたりにはもう誰もゐないと思ふと、こらへてゐた涙が一時に溢れ落るのを急いでハンケチで押へて。この家のお父さまは何も知らずに居らつしやるのであるが、自分と進との間柄は今では名ばかりの夫婦で、入籍するの、しないのといふやうな状態ではない。夫の進は一昨日家を出たなり今夜も多分歸つて来ないであらう。この二三年原稿の製作を口實にして隨意に外泊することはもう珍しくはない。いづれ二三日すれば歸つて来るであらうが、今のやうな状

況では、自分を正妻にして籍を入れる事をまさか拒みはしましけれど、さして喜びもしない事は言はずと明である。事によれば却て迷惑さうな顔をしなにとも限らない。と思ふと、鶴子は老人の好意をかたじけなく思ふにつけ、其の好意を受け

る事のできない身の上を省みて涙を催さずにはゐられなかつたのである。進と鶴子との戀愛生活は鎌倉に家を借りてゐた間、わづか一年くらゐのものであつた。進は一躍して文壇の流行兒になり、俄に賣文の富を得るやうになると、忽ち杉原玲子といふ活動寫眞の女優に家を持たせるばかりか、絶えず藝者遊びをするやうになつた。その後玲子が進を捨て、同業の俳優と正式に結婚をすると、進はすぐ其代りにカツフェーの女給を妾にするといふ有様。鶴子は殆どあきれ返つて、嫉妬の情を起すよりも次第に夫の人格に對して底知れぬ絶望の悲しみを抱くやうになつた。鶴子は女學校に通つてゐた時から、フランスの老婦人に就いて語學と禮法の個人教授を受け、また國學者某氏に就いて書法と古典の文學を學んだ事もあつたので、

結局それ等の修養と趣味とが却て禍をなし、没趣味な軍人の家庭には居た、まればなかつた。それと共に自分から夫に擇んだ文學者清岡進の人物に對しても永く敬愛の情を捧げてゐる事ができなくなつたのである。初め輕井澤の教會堂で人から紹介せられた時の進と、今は通俗小説の大家を以て目せられてゐる進とを比較すると、全く別の人としか思はれない。五年前の進は勉學の志を擲たない眞率な無名の文學者であつたが、今日の進は何といつてよいのやら。思想上の煩悶などは少しもないらしい様子で、その代り絶えず神經を鋭くして世間の流行に目を着け、營利にのみ汲々としてゐるところは先相場師と興行師とを兼業したとでも言つたらよいかも知れない。新聞に連載してゐるその小説を見れば、今まで世にありふれた講談や傳奇を現代の口語に書替へたまでの事で、忌憚なく言へば少し讀書好きの女の目にさへ、これでは殆讀むには堪えまいと思はれるくらゐのものである。鶴子は進が去年の暮あたりから或婦人雜誌に連載し出した小説を見た時、ふと六樹園の飛彈正物語

の事を思出して、娘の時分源氏の講義を聞きに行つた國學者の先生が、いつも口癖のやうに今の文士にくらべると江戸時代の作者がどれだけ優れてゐるか知れないと言つたことなどを夢のやうに思返した事もあつた。平生家へ出入する進の友人を見れば、言葉使ひから様子合ひまで、いづれも兄弟かと思はれるほど能く似た人ばかりで、二三人集まればすぐ洋酒を飲み、胡坐をかいたり寢そべつたりして、喧嘩でもするやうな高調子。その談話は何かと聞けば、競馬の掛けごとに支那賭博、友人の悪評、出版屋の盛衰と原稿料の多寡、その他は女に關する卑猥極る話で持切つてゐる。

鶴子は既に幾たびとなく決心して、折があつたら進の家を去らうと思つてゐた。今更兄の家の厄介にはなれないので、其の當時義絶の證として與へられた金がまだ半分位は銀行に預けてあるのをたよりに、間借りでもして、何處かの事務員にでも雇はれやうとまで、すつかり覺悟をきめて、それとなく最後の破綻の來る時を待つ

てゐたが、進の方からはまさか手切金の請求を恐れただけでもあるまいが、そのま
まに何事も言出さず、表向きはどこまでも令夫人らしく冷に崇め奉つて居るので、
月日のたつにつれて、さすがに女の方から突然別ればなしを持ち出す譯にも行かず、
つい言出しそびれて今日に至つた。それや此れやの思ひに暮れて、鶴子はハンケチ
を口に銜へたまゝ、臺所の柱に身をよせかけ、葡萄棚に集る虻の羽音を聞いてゐた。
突然人の跫音がしたので、鶴子はびつくりして様子をつくらうとしたが、眼の縁
に残つた涙の痕と、憂ひに沈んだ顔の色とは俄にどうする事もできない。
老人は鶴子が勝手へ行つたまゝ、いつまでも戻つて来ないので、性の好くない行商
人でも来たのではないかと、何気なく様子を窺ひに来たのである。
「鶴子。心持でもわるいのぢやないか。何なら少しお休みなさい。」
「いゝえ。別に。」と言ひはしたものの、鶴子は身體の置場にこまつて板の間にべつ
たり坐つた。

「顔色がよくない。」と老人は既に様子を察したものらしく、「わしは人から聞いたは
なしは何事によらず他言はしない。むかし細井平洲といふ先生は人の手紙を見ると
其場で焼いてしまつたといふ事だ。心配せん方がよい。」
鶴子はこの時胸にある事は何も彼も此の老人だけには打明けてしまひたい氣にな
つて、縋るやうにその足下に摺寄り。
「お話ししたい事が御在ますの。わたくし、お父さまより外には、お話ししたいと思ひ
まして、誰もお話しする方が御在ませんから。」
「うむ。聞きます。先刻からどうも様子が變だと思つてゐた。」と老人は酒屋の男が
明放しにして行つた勝手口の硝子戸に心づき、手を伸してそれを閉めた。
「お父さま。あのおはなし。あれはもう、折角の思召しで御在ますけれど、實はも
う、なんにもならない事だと存じますから。」と涙を噉つた。
「さうか。家がうまく行つて居らんのか。困つたものだ。お前の考はどうだ。此の

末望みがないのか。」

「今のところ、別にどうといふ事も御在りませんが、籍を入れましたも、ほんの名義だけの事で、いつどういふ事になるか分りませんから、却て此のまゝの方がよくなるか知らず、さういふやうな心持もいたします。わたし、ほんとに我儘な事ばかり申しまして……。」

「いや、それで事情は大抵わかりました。お前に向つて進の事を悪くいつては甚氣の毒だが、これは進ばかりには限らん事で、今日文學を弄ぶ青年に物の道理を説いてきかしてもわかる筈はない。わしは長年教師をしてゐたから其のくらの事はよく知つてゐます。見込みのあるものなら、呼びつけて意見もして見るが、わしはまづ駄目だとあきらめてゐる……。」

「わたしが、何か申上げたやうになりましたも困りますし……。」

「それは今も言ふ通り、わしは一切何も言ひません。然し此のまゝにして置いたら、

行末お前が困るでせう。それが氣の毒だ。」

「いえ。わたくしは、もうどの道、若い身空でも御在りませんから、行先の事は別にそれほど心配しては居りません。長い間には宅の心持もまたどんな事で直らないとも限りませんし……。」

「うむ。うむ。」と老人は立つたまゝ腕を拱いて嘆聲を發したが、裏木戸の方に音のするのを聞きつけ、「傳助が歸つて來たらしい。あつちで話をしませう。」

老人は手を取らぬばかりに鶴子を急ぎ立て、勝手から立ち去つた。

六

雨は降つてゐるが、小降りで風もなく、雲切れのし始めた入梅の空は、まだなかなか暮れきらぬ七時頃。富士見町の待合の野田家の門口へ自動車を乗りつけた三人連。一人は清岡の原稿賣込方を引受けてゐる駒田弘吉といふ額の禿げ上つた鰐口の五十

男に、一人は四十あまり、一人は三十前後の、一見していづれも新聞記者らしい眼鏡をかけた洋服の男である。駒田が先に格子戸を明け、靴をぬぐ間から女中にかにかひながら、どや／＼と表二階の広い座敷へ通る。前以て電話が掛けてあつたものと見えて、煙草盆に座布団も人の敷だけ敷いてあつて、煉香の匂がしてゐる。「お風呂呂がわいて居ります。」と女中の挨拶に、間もなく此の土地では姉さん株らしい三十近い年増と、二十前後の藝者が現はれ、女中の運び上げる料理の皿を卓の上に並べる。

駒田は現在〇〇新聞に連載せられてゐる清岡の小説が程なく半月くらゐで完結する見込なので、早くも別の新聞社へ交渉して次の原稿を賣込む相談をまとめたところから、編輯長へは内々で割戻しの礼金も渡してしまひ、部下の記者は××に連れて来て酒肴を振舞ひ藝者を×××腹である。

「先生も、もうそろ／＼お出でせう。構ひませんから先へやりませう。」と駒田は盃

を年上の記者にさして吸物椀の蓋をとる。

「僕はどうも飲む方は得意でない。」と年上の記者は藝者に酌をさせながら、「まづ箱なしの一方といふやつだ。」

「恐入りましたね。賣ッ兒はそれでなくつちやいけません。」

「お前、どこかで見たことがあるな。思出せないが。まさかカッフェーでもあるまい。」

「いゝえ。さうかも知れませんが。この頃は藝者が女給になつたり、女給さんが藝者になつたり、全く區別がつきませんからね。」

「藝者から女給になるのはざらだが、カッフェーから藝者になるのは少いだらう。」

「少いこともないわ。随分あつてよ。ねえ。姐さん。」

「さうか。随分居るか。それは驚いた。」

「さうねえ。五六人……さがしたらもつと居るかも知れないことよ。」

「銀座あたりに居た奴はゐないか。」

「辰巳家から此間お弘めした兒、なんて云つたつけ……。」と年増が飲みかけた盃の手を留めて、眉を寄せ、「あの兒はたしか銀座にゐたんだわね。」

「新橋會館よ。」と若い方の藝者が直に答へた。

「新橋會館に。さうか。いつ時分だらう。」と今まで黙つてゐた若い記者が急に卓を押し出したので、駒田は女中を見返り、

「その藝者を掛ける。おい。名前は何ていふんだ。」

「辰巳家の辰千代さん。」と若い藝者が名ざしをしたので、女中はすぐさま立ちかけた時、下から、「お花さん。お客様がお見えになりました。」

「先生だらう。」と駒田は襖の方を見返りながら、少し席を譲る間もなく、梯子段に登音がして、バナマ帽を片手に、鼠セルの二重廻を着たまゝ、上つて來たのは、清岡進である。

「おそくなつて失禮しました。」と進は年増の藝者に帽子と二重廻しを渡し、お召の一重物に重ねた鐵無地一重羽織の紐を結直しながら、卓の上に小皿と箸の置いてある空席に坐る。年輩の記者は既に知り合つてゐると見え、若い記者を紹介したので、直様茶ぶ臺の上で名刺の交換が始まつた。女中が藝者の返事と共に銚子を持つて來て、

「辰千代さん。すぐ伺ひます。」

「ほんとに皆さん、あがらないのね。」と年増が新しい銚子を受取て、

「あなた。お一ツ。」

「一向景氣がつかないやうだね。」と清岡は酌をさせながら、駒田を顧て、「まだ後から來るのか。」

「目下大に選定中なんですよ。まだ外に知らないか。女給藝者があるから、ダンサー上りや女優上りもゐるだらう。どうせ、呼ぶなら變つたのがい。」

「こちら、ほんとに物好きねえ。」

「家にも此のあひだまで一人變つたのが居ただけけれど、誰がいゝか知ら。」

「妓さん、桐花家さんの。評判ぢやないこと。」

「ウム。京葉さん」と年増は膝を叩いて、「あの人なら寧ダンサー以上。逆立くらゐやり兼ねないわ。」

「その代り大變な御面相だらう。」

「ところが綺麗で、色つぼいのよ。何しろ此の土地で一番いそがしい人ですもの。」

「いやに宣傳するなア。いくら貰つてゐるな。兎に角呼べ呼べ。」と駒田はすこし酔ひ始めたらしく大分元氣づいて來たが、清岡は桐花家京葉の名を聞くと共に、去年残暑の頃の一件を想起して厭な心持がしたが、此の場合よせとも言へないので、素知らぬ顔をしてゐると、年増の藝者は座談に興を添へるつもりで、

「わたしだつて、もう三四ツ年がわかれば藝者なんぞやめて銀座へ押出しますわ。」

女給さんの方が兎に角表面だけは素人なんですからね。何をするにも胡麻化しがききますよ。わたし、つくづくさう思つてゐるのよ。わたしの家のすぐ隣が××さんなのよ。其の家へいろ／＼な××××を連れて來る女給さんがあるのよ。家が建込んでゐるから、窓から首を出せば障子一重で、話はみんな聞えてしまふのよ。身丈がすらりとして、身なりは藝者衆よりいゝ位だから、銀座でもきつと一流のカツフエーでせうよ。いつでも來るのは朝早いよ。九時前の時もあるわ。それから正午になるかならない中お立ちだわ。此方は九時や十時ちややつと眼がさめた時分でせう。それに今のところ抱はゐないし家の内はしんとしてゐるから、つい耳をすまして聞く氣になるのよ。」

清岡はだまつて若い方の藝者に酌をさせてゐる。記者は二人ともいかにも面白さうに「うむ、それから、それから。」とあほり立てるので年増も興にまかせて、「相手の×××は時々ちがふらしいのよ。だけれど、いつでも君さん／＼といふか

ら、きつと君子さんとか君代さんとかいふんでせうよ。實にすごいものよ。いつだつたか感心しちまつた事があるわ。」

清岡は上目づかひにじろりと記者の顔を見た。駒田も年を取つてゐるだけ、すぐに氣がつき、藝者のはなしがドン・フワンの君江の事だなければいゝがと心配したらしく、それとなく記者の方を見たが、記者は二人とも案外銀座のカツフェーの事には明くないと見え、別に心當りもない様子で「感心したといふのは一體どういふ事なんだ。藝者よりも濃厚だつていふのか。」

「それア勿論さうよ。まアお聞きなさいよ。虚言見たやうなはなしだけだ……。駒田は兎に角長く話さして置いてはいけないと、氣轉をきかして「おい。さつき呼んだ藝者はどうした。催促するやうにさう言つて來い。」

「はい。」と立上つたのは若い方の藝者なので、駒田は更に「おれはそろ／＼飯をくはう。」

「僕もつき合ひませう。」と酒を飲まない記者が駒田に同意した。御飯の給仕やら番茶の入替やらで、どうやら年増藝者のはなしも中絶した時、辰千代といふ女が明けてある襖の外に手をついた。

年は二十ばかり。つぶしの島田に掛けたすが糸も長目に切り、薄紫に飛模様の裾を長々と引いてゐるので、肉付のいゝ大柄な身は藝者といふよりも娼妓らしく見られた。

「銀座にゐたのはお前か。」

「えゝ。さうよ。」と辰千代は寧得意らしい調子で、「あつちでお目に掛かつたか知ら。何しろわたし眼がわるいんでせう。だから失禮ばかりしてゐるのよ。」

年増の藝者は辰千代が自分の方には見向きもせず獨りでべら／＼しゃべり續けるのを、さも苦々しうに尻目に見返したが、此方是一向氣がつかない様子で、さゝれる盃を立てつゞけに二杯干して若い記者に返しながら、「こつちへ來てから一度

も銀座の方へ行かないから、きつと變つたでせうね。今どこが一番賑なのか知ら。」

「お前、先に何處にゐたんだ。コロンビヤか。」

「あら、失禮しちやうわ。新橋會館よ。」

「どうして藝者になつたんだ。あんまり發展しすぎて睨まれたんだらう。」

「さう仰有るけれどカツフェーは割に堅いことよ。何しろ晝間から夜の十二時まで
はちやんとお店にゐるんですもの。」

「十二時から先のはなしさ。」

「十二時から先は誰だつて寝るんぢやないの。夜通し起きては居られないぢやない
の。ねえ。あなた。」

其時同じく濱島田に結つた小づくりの年は二十二三の藝者につづいて、ハイカラ
に結つた身丈の高い十八九の藝者が来て末座に坐る。清岡は小づくりの女が京葉だ
といふことは、いつぞや市ヶ谷八幡の境内から窃に君江の跡をつけた晩、一生涯忘

れる筈のない程はつきり見覚えてゐる。然し相手には自分の顔を見知られない方が
何かの場合都合がいゝと思つて、その後二三度この土地へあそびに来た時も用心し
て逢はないやうにしてゐたので、自然横を向いて煙草の烟ばかり吹いてゐると、駒
田は飯をすませて廊下へと立つ。

「駒田さん。ちよいと。」と女中が裏梯子の方へ引張つて行つて、「お北姐さん。丁度

二本になりますから、もう返してもよろしいでせう。」

「後の奴はみんな間に合ふのか。」と駒田は時計を見た。

「菊代さんだけ少し高いんですけれど。」

「そんならそれも返してしまへ。どの道、おれはいららないんだから、三人残して置
けばいい。」

「おやア、京葉さんに、辰千代さんに、松葉さん。」と念を押して、「どういふ風にし
ませう。」

女中が相方をきめるのに困つてゐるらしいのを見て、駒田は厠から帳場へ姿をか
くし、それから清岡を呼出し、座敷には招待した記者二人を残して好きな藝者を選
り取らせる事にした。

「さう致しませう。」と女中はまづ年増藝者を返すやうに座敷へ行つて見ると、若い
記者は女給上りの辰千代を膝の上に載せて窓に腰をかけ外を見ながら、流行唄を唄
つてゐるので、これは其のまゝにして、年上の記者に耳打をした。清岡は様子を察し
て何とつかず立つて厠へ行き、駒田をさがす振りで裏梯子から下へ降りて、再び二
階の座敷へ戻つて見ると、記者の姿は二人とも見えず、女中が脱いである洋服の上
着と折革包とを持ち、立ちかけた京葉に、「三階のすぐ突當り。」と、教へてゐるところ
であつた。清岡は何事も氣のつかない振りをして、窓の敷居に腰をかけると、一人
取残された身丈の高いハイカラな藝者は、其の場の様子から清岡を自分の出る客と
思つたらしく、「もう霽れたやうね。」と言ひながら竝んで腰をかけた。

雨はいつか歇んで、雨側とも待合つゞきの一本道には往來する足駄の音も稍繁く
なり、遠い曲角の方でバイオリンを弾く門附の流行唄が聞え出した。

「今歸つたお北の家はどこだ。富士見町の方か。」と、清岡は何の譯もないやうな風
できいて見た。實は先刻其の女のはなしをした鄰りの待合の事が氣になつてゐたか
らである。

「いゝえ、三番町もすつと先の方……。」

「それぢや、女學校か何かある、あつちの方か。」

「えゝ。さうよ。わたしの家もお北姐さんの家のすぐそばだわ。」

「さうか。お北の家の鄰りは待合だつて云ふぢやないか。」

「えゝ。千代田家さんでせう。先どなりがお北さんの家で、手前の方がわたしの
る家なのよ。」

「さうか。それぢや其の家がちがひない。背中合せになつてゐる待合がありやアし

ないか。」

「何だか變ねえ。」

「義理があるから、今度行かうと思つてゐるんだけど、様子がわからないからさ。」

「あの邊でお茶屋さんは千代田家さんだけだわ。何しろ許可地の一番はづれでもの。」

女中が三階から降りて来て、「どうぞ。」と言つたが、清岡はあまりぞつとしない藝者なので、

「鳥渡用があるんだが、駒田はどうした。まだ歸りやアしまい。」

「先程お帳場で旦那とお話して居らつしやいました。見て參りませう。」

女中が立ちかけた時、駒田は上着のかくしへ大きな紙入を差込みながら、表梯子を上つて来た。駒田は商賣の取引ならば待合でもカツプエーでも何處へでも出入りするが、自分では滅多に女など買つたことのない男で、新聞社の營業部に勤めてゐ

た頃から株相場や家屋地所の賣買に手を出し、今では大分身代をつくり上げたと言ふ噂であるが、それにも係らず、電車の出来ないむかしから、今以て四谷寺町邊の車さへ這入らぬ細い横町の小家に住んでゐる。清岡は駒田の事を爪に火をともし流儀の古風な守銭奴だと思つてゐる。

「駒田君。歸るなら一緒に出やう。まだ時間は早いし、どうせ電車だらう。」

「君はこれから銀座へ廻るのかね。」

「イヤ、彼奴はもう止めた。君も知つてゐるやうな始末で、あゝ見さかひなしに誰でも御座れちや、全く名譽毀損だからな。すこし相談したい事があるんだ。兎に角ぶら／＼出かけやう。」

「アラ、ほんとにお歸りなの。」と藝者はさも驚いたやうな顔をしたが、清岡は見向きもせず、丁度窓際の柱に呼鈴の紐がついてゐたのを引寄せて、ボタンを押した。駒田は清岡と共に表梯子を降りながら、急に思出したらしく、送り出す女中を顧

て、「おい〜。お泊りのやうだつたら藝者は明日の朝時間通りに返してしまへ。」

「それはもう承知して居ります。」

「別に忘れ物はなかつたな。マッチを貰つて行かう。」と駒田は靴をはきながらも、さすがに抜目がない。

「またどうぞ。お近い中に。」といふ聲を後に二人は格子戸をあけて外へ出ると、雨あがりの空には月が出てゐて、色町の横町はいかにも夏の夜らしく、往來する女の浴衣が人の目を牽く。

「駒田君。これから、赤坂までつき合はないか。」

「この頃はあの方面ですか。」

「カツフェーももう飽きたからね。やつぱり藝者が一番いゝな。少しピンとしたやつをどうかしやうと思つてゐるんだがね。」

「どうかすると言ふのは、身受でもしやうといふはなしですか。それは考物です

よ。

「君に相談すれば、きつとさう言ふだらうと思つてゐたんだ。」

「まとまつた金を出すことは兎に角止した方がいゝですよ。藝者の身受も將來奥さんになれるとか何とかいふ目當があれば、女の方も其のつもりで眞面目になるでせうが、さうでなければ、きつと面白い事が起つて結局お止めになるんですからな。」

「將來は、僕の方だつてわからない。また一人になるかも知れないし……。」

「さうですか。風雲頗急ですな。」

「イヤ、まだそれ程の事でもないんだがね。どう云ふもんだか、家へ歸ると陰氣になつていけない。」

清岡は問はれるまゝに、家の事情を委しく語りたいたと思ひながら、さてどういふ風に、何からはなし出したらいゝものかと考へながら歩いて行く中、忽ち富士見町

の電車停留場に來てしまった。抑清岡には最初から鶴子を正妻に迎へる程の堅い決心があつたわけではない。唯折々人目を忍んで逢瀬をたのしむくらゐに留めて置くつもりであつたが、女の方が非常にまじめで、事件が案外重大になつてしまつたので、どうする譯にも行かず、幸女が其兄から金を貰つたのを聞いて鎌倉に家を借りて同棲したやうな次第であつた。勿論人の妻として才色兩つながら非の打ちどころのない事は能く承知してゐるが、其後清岡は月日の立つにつれて自分の品行の修らないところから、何となく面伏な氣がしだして、冗談一ツ言ふにも氣をつけねばならぬやうな心持がして窮屈でなくなつた。それがため、一日に一度はどうしてもカツプエーか待合に行つて女給か藝者を相手に下らない事を言ひながら酒を飲まなければ心寂しくてならないやうな習慣になつた。清岡は女給の君江が最少し乗氣にさへなつてくれれば、明日と云はず即座にカツプエーなり酒場なり開業させやうと思ひながら、さういふ相談には君江ではいかにも頼みにならないところから、い

つそ方面を轉じて、これぞと思ふ藝者の見つかり次第、藝者家でも出させて見やうかといふ氣になつてゐる。實はそれ等の相談もして見たいと思つて、駒田を誘ひ出したのであるが、駒田は電車が近づくのを見ると、早くも折革包を抱え直して、年寄りのくせに飛乗りでもしかねまじき様子。清岡は忽ち興がさめて、

「それぢや失禮。僕は鳥渡寄るところがあるから。」

「あした。午後は〇〇社に居ますから、御用があつたら電話をかけて下さい。」と駒田は電車に乗つた。

時計を見ると十時である。清岡はこのまゝ家へ歸れば、さしておそいといふでもなく、丁度程好い時間だとは思ひながら、夜ふかしの馴れた身は、何となく物足りない氣がして、もう一軒どこへか立寄つてからでなくては、どうしても足が家の方へは向かない。然し今時分、丁度酔客の込合ふ時刻には、銀座のドン・フワンなどへは君江との關係もあるところから、うかく一人では行かれない。銀座邊の飲食店

を徘徊する無頼漢や不良の文士などから脅迫される虞もあり、又君江が醉客を相手に笑ひ興ずるのを目の前に見てゐるのも不愉快である。清岡はこれから立寄るべきところは、まづ此の間から折々出かける赤坂の待合より外にはないと思ひながら、然し目ざした藝者は既に五六度呼んでゐるにも係らず今もつてなか／＼承知する様子がないので、今夜あたりも大抵話はまとまるまいと思ふと、行かない先から、何やら無暗に腹立しい心持になつて来る。然し此の腹立しさもよく／＼考へて見ると、あの藝者が自分の意に従はないといふ事から發してゐるのではなくて、その原因はやはり君江に對する平素の憤りから起つてゐる。君江がもし自分の思ふやうにさへなつてゐれば、何もあんな藝者にふられるやうな馬鹿な目に遇はなくてもすむ事だと思ふと、一時ゆるがせにしてゐた報復の悪念が又してもむら／＼と胸中に湧き立つて来る。清岡が君江に對して、何よりも腹が立つてならないのは、平素君江が何の心配もなく面白さうに日を送つてゐる事で、其の次には君江が名聲籍々たる文

學者の戀人である事をさほど嬉しいとも思つてゐないやうに見える事である。若し自分が關係を斷つやうな事があつても女の方では別に名残惜しいとも何とも思はないやうに見える事である。君江は自分との關係が斷えれば却てそれをよい事にして、直様代りの男を見付けて、今と同じやうに、たわいもなく浮々と日を送るに相違ない。虚榮と利慾の心に乏しく、唯懶惰淫恣な生活のみを欲してゐる女ほど始末にわるいものはない。かういふ女を苦しめるには肉體に痛苦を與へるより外には仕様がなにかも知れない。と云つて、まさかに髪を切つたり、顔に疵をつけたりする事もできないとすれば、まづ二三ヶ月も床につくやうな重い病氣に罹るのを待つより外に仕様がなわけである。そんな事を考へながら足の向く方へとふら／＼歩きながら、ふと心づいて行先を見ると、燈火の煌々と輝いてゐる處は市ヶ市停車場の入口である。斜に低い堀外の町が見え、またもや眞暗に曇りかけた入梅の空に仁丹の廣告の明滅するのが目についた。

君江の家はあの廣告のついたり消えたりしてゐる横町だと思ふと、一昨日から今夜へかけてまづ三日ほど逢はないのみならず、先刻富士見町で藝者から聞いたはなしも思ひ出されるがまゝ、兎に角そつと様子を窺つて置くに若くはないと思定め、堀端を歩いて、いつもの横町をまがつた。

角の酒屋と藥屋の店についてゐる電燈が、通る人の顔も見分けられるほど隈なく狭い横町を照してゐる。清岡は去年から丁度一年ほど、四五日目にはこゝを通るので、店のものにも必顔を見知られてゐるにちがひないと、俄に眉深く帽子の鍔を引下げ、急いで通り過ると、其の先の駄菓子屋と煙草屋の店もまた戸をしめすにゐたが、こゝは電燈も薄暗く店先には人もゐない。路地の入口の肴屋はもう表の戸を閉めてゐるので、鳥渡前後を見廻し、暗い路地へ進入らうとすると、其の途端にばつたり行き會つたのは間貸しの家の老婆である。闇にまぎれて知らぬ振りで行き過ぎやうとしたが、老婆は目ざとく、「アラ旦那」と呼びかけ、「一歩ちがひで、まア能

う御在ました。不用心ですから鍵をかけて、お湯へ行かうと思つたんですよ。お君さんも今夜はお早いですか。」

「イヤ鳥渡市ヶ谷まで用事があつたから、寄つて見たんだよ。歸つて来るまで、とても待つては居られないから、今夜寄つたことは黙つておくれ。また心配するからなア。」

「ぢや、お茶一ツ上つて居らつしやいまし。」
「でも、をばさん、お湯へ行くんだらう。」
「ナニ、あなた。まだ急がないでもよう御在ます。」

清岡は振切つて去るわけにも行かず、勧められるがまゝ、老婆の寢起してゐる下座敷に通り長火鉢の前に坐つた。座敷は二階と同じく六疊ばかり。壁も天井も煤けて、床板も抜けた處さへあるらしいが、隅々まで綺麗に片づいてゐて、障子や襖紙の破れも残らず張つてあるなど、もし借手さへあればこゝも貸間にするのかとも思はれ

るくらゐである。床の間には一度も掛替へたことのないらしい摩利支天か何かの掛物がかけてあつて、澀紙色に古びた安箆の上には小さな佛壇が据えられ、長火鉢にはびか／＼に磨いた吉原五徳に鐵瓶がかゝつてゐる。かういふ道具から老婆の年齢も大方想像がつくであらう。老婆が口づから語る所によれば、日露戦争の際陸軍中尉であつた良人が戦死してから、下女奉公に行つたり派出婦になつたり又手内職をしたりして、一人の娘を養育したが、其の娘は幸ひにも資産のある貿易商の妻になり、夫婦とも現在は亞米利加に居住してゐて、老婆には不自由のないやうに仕送りをしてゐるとの事である。併し人の噂では、娘からの仕送りは眞實であるが、娘は始め西洋人の妾になり子供が出来て其のまゝ、旦那の本國へ連れられて行つたのだともいふ。いづれが眞實やら、清岡は定めかねてゐるのみならず、君江が始めどうしてこの家の二階を借りたのやら、そして何故、もつと場所柄のいゝ綺麗な家へ引移らずにゐるのやら、その事情もはつきり知ることが出来ないのである。老婆は中

尉の妻だつたと云ふが、現在の様子や物の言ひざまから見れば、本所淺草邊の露地裏によく見るやうな老婆で、生れも育ちも好くない事は、酒屋の通帳がやつと讀める位。洋服を着て髭を生した人をわけもなく尊敬する事から萬事は大抵想像されるのである。清岡はこの老婆に向つて、自分の來ない間君江が何をしてゐるかを、今更きいて見たところで、何の得るところもないだらうと思つてゐるので、日頃の鬱憤などは顔色にも現はさず、努めて氣嫌のいゝ調子をつくり、

「カツフェーへ行くといろ／＼な人に逢ふんで實に困るのだよ。だから夜は前を通つてもなりたけ入らないやうにしてゐるのさ。」

「それが能御在ますよ。御身分のある方はつい人が目をつけて、何の彼のと噂をしたがるもんですからね。オヤもう十一時ですね。」と婆は隣の時計の鳴る音を聞きつけ、箆の上の八角時計を見上げ、

「旦那、もう一時間お待ちになればいゝんでせう。待つてお上げなさいませよ。火

鉢に火でもついで置きませう。」

「をばさん。何も今夜にかぎつた事ぢやない。あしたゆつくり来るからさ。」と清岡は敷島の袋を袂に入れたが、婆は最初から清岡が時ならぬ時分この近所を徘徊してゐたらしい様子といひ、又日夜見知つてゐる君江のふしだらとを思合せて、大抵それと察しながら、これもわざと氣のつかない振をして、

「それでも旦那、お待たせして置かないと、後で君江さんに叱られますから。」

「だまつてゐれば知れやしない。」

「それでも何だかわたしの氣がすみませんからさ。酒屋の電話をかりて掛けて來ませう。」と婆は長火鉢の曳出しをさぐつて、電話番号をかけた紙片を取り出した。

「それぢや、兎に角歸るまで二階にごろくしてゐやう。十二時には歸つて來るにしまつてゐるんだから、電話なんぞ掛けないでもいゝよ。」と清岡は立ちかけて、「をばさん、留守番をしてゐるから、何なら湯へ行つてお出で。」

清岡は老婆を錢湯にやり、二階へ上つて、祕密の手紙でもあつたら手に入れやうと云ふ下心。老婆は前々から不意の事が起つたら電話で知らせるやうにと君江からくれぐれも頼れてゐるので、錢湯への道すがら酒屋か藥屋から電話をかけるつもりで、電話番号の紙片を帯の間にはさみながら出て行つた。

七

をばさんから電話がかゝつた時、君江は折よく電話室に近いテーブルのお客と飲んでゐたので、呼ばれるが否や、すぐに立つて電話を聞いたが、もう三十分で店のしまふ刻限、大分酔が廻つてゐる上に、あたりの騒々しさに、清岡先生の來てゐることだけは通じたけれど、それについてをばさんのくどくど言ふことは一向に聞取れなかつた。兎に角今夜は清岡さんの來べき晩ではなく、且又前以て何のたよりさへなかつたところから、君江は安心して既に宵の口に木村義男といふ洋行歸りの

舞踏家とどこへか泊りに行く約束をしてしまつた所へ、其の後二三度馴染みになつた自動車輸入商の矢田さんが来て、カツフェーの歸りに春代と百合子の二人をも誘つて、松屋呉服店の裏通りに此頃開店した麗々亭とかいふおでん屋へ是非とも寄つてくれ。外に約束があるなら一時間でも三十分でもよいからと言つて、一度外へ出てから、今方再び立戻つて来て、四五人の女給にいろ／＼な物を食べさせて居る最中である。これと殆ど前後して、いつもカツフェーなどへは来た事のない松崎さんと云ふ老紳士が今夜にかぎつてひよつくり姿を現した。尤も東京驛へ人を送りに行つた歸りだと云ふ事である。

銀座通りのカツフェーは此のドン・フワンに限らず、いづこも十時過ぎてから店のしめ際になつて急に込み合つて來るのが常である。絶間なく鳴りひびく蓄音機の音も、どうかすると掻消されるほど騒しい人の聲やら皿の音に加へて、煙草の煙や塵ほこりに、唯さへ頭の痛くなる時分、君江は自分ながらも今夜は少し酔ひ過ぎた

と思つてゐる矢先、目の前には三人の男が落ち合つたのみならず、家の方にも待つてゐるものがあると聞いて、どうしてよいのやら、殆ど途法に暮れてしまつた。今夜にかぎつて、どうしてかうも都合が悪いやうになつたのだらうと、自分の身よりも罪のない他人を恨むばかり。一層この場で酔ひつぶれてさへしまへば周囲の者が結局どうにか始末をつけてくれるだらうと、君江は松崎老人の卓に来て、

「今夜わたしを／＼に酔つて見たいのよ。オトカを飲まして頂戴。」

「何かいざこざがあるな。お客と喧嘩でもしたのか。」と松崎は年を取つてゐるだけに、すぐに氣がついたらしい。

「いゝえ。さうぢやないのよ。だけれど。」

「だけれど。やつぱりさういふ譯ぢやないかね。」

君江は返事に窮つて黙つてしまつたが、其時ふと、此の老人とは女給にならない以前からの知合ひで、身の上の事は何も彼も承知してゐる人だから、内々打明けて

相談した方がよいかも知れないと思ひついた。折好くテーブルには一人も女給が居ないので、君江はびつたり寄添ひ、

「今夜、わたしこまつてしまつたのよ。こんな都合のわるい事は始めてだわ。」

其の語調と様子とで、松崎は忽ち萬事を洞察したらしく、「おれはもうすぐ歸るつもりだよ。今夜は唯カッフエーの景氣を見物に來たばかりさ。逢ふのは其の中ゆつくり晝間にしよう。」

「すまないわねえ。あなた、怒らないで頂戴。よくつて。」

「おこるものか。おれにはもう分つてゐる。お客がかち合つてゐるんだらう。」

「さすがに小父さんだけあるわねえ。どうして分るんだらう。」と君江は松崎の耳に口を寄せて今夜の始末を包まずに打明け、「何かうまい工夫はないか知ら。」

「いくらでも有るさ。わけはない。」と松崎はすぐに一策を授けた。それは先カッフエーの歸り大急行で一人の××××へ連れて行き、どうしても泊るわけには行か

ないからと、暫くしてから、男が歸り仕度をしない中、お先へ失禮と言つてあわて歸る振り、××××へ姿をかくす。其の前に極く懇意な友達の女給に頼んで市ヶ谷の家へ寄つてもらひ、間貸しのをばさんに、或お客様が自動車で送つてやるからと言ふので、何の氣もなく一緒に乗つたところ、無理やりに××へ連れて行かれた。仕様がなから藝者を呼ばせお酒だの御料理だの取らせてゐる間に、自分だけ隙を見て逃げ出して來たのだから、急いで君江さんを迎ひに行つてくださいと、言ふのだ。さうすればきつと清岡が自身でその××へやつて來るにちがひはない。それまでになつぶり一時間あまりはかゝるから、其の間に××××位お前の腕ならどうにでも始末はつけられる筈だ。もう一人のお客には、人目を憚るからと口實を設けて、一人先へ別の家へ行かして、氣の毒だが、其の方はそれなり×××しを喰はしてしまふのだ。勿論其の時はひどく怒るだらうが、怒るほど内心未練が強くなるのにきまつてゐるから、翌日必恨みを云ひにやつて來る。其時思ふさま嬉しがら

してやれば効果は寧ろ平穩無事の時より以上になるだらう。松崎は刈り込んだ半白の口髭を撫でながら、微笑して「併し、かういふ仕事をするには、呑込の早い、氣のきいた家でなくつちやいけない。心安い家でうまい處があるか。」

「さうね。牛込の彼處はどう。諏訪町時分にあなたとも二三度行つた家さ。この頃三番町にもちよい／＼往くところがあるのよ。」

その時持番の女給が來たので、君江は取りとめのない冗談を言ひながら立つて行つた。松崎はもう半時間ばかりたてば戸をしめる時間になるので、その間に君江のお客はどんな人か。又君江が果してどういふ行動を取るかをも見究めたいやうな心持もしたが、それまで自分がこゝに居坐つてゐてはやりにくからうと察して、程なく勘定を拂つて外へ出た。兩側の商店は既に灯を消し戸を鎖してゐる。夜肆も宵の中雨が降つてゐたのと、もう時間がおそいので、飲みくひする夜臺店が残つてゐるばかり。銀座の大通りは左右のひろい横町もとも／＼見渡すかぎりひつそりして

ゐて、雨氣を含んだ闇の空と、濕つた路の面に反映するカッフエーや酒場の色電燈が目につくばかりである。劇場や興行物は既に一時間ほど前には閉場してゐるので、今頃ぶら／＼歩いてゐる男女は悉くカッフエーへ出入するものとしか思はれない。通り過る電車は割合にすいてゐて、辻自動車ばかりが行先の見えぬほど街の角々に徘徊してゐる。

松崎は今ではたまにしか銀座へ來る用事がないので、何といふ事もなく物珍しい心持がして、立止るともなく尾張町の四辻に佇立んだ。そしてあたりの光景を觀望すると、いつもながら今更のやうに此の街の變革と時勢の推移とに引きつゞいて其身の過去半生の事が思返されるのである。

松崎は法學博士の學位を持ち、もと木挽町邊に在つた某省の高等官であつたが、一時世間の耳目を聳動させた疑獄事件に連坐して刑罰を受けた。然しそれがため出獄の後は生涯遊んで暮らせるだけの私財をつくり、子孫も既に成長し立身の途につ

いてゐるものもある。疑獄事件で收監される時まで幾年間、麴町の屋敷から抱車で通勤した其の當時、毎日目にした銀座通りと、震災後も日々に変つて行く今日の光景とを比較すると、唯夢のやうだと云ふより外はない。夢のやうだといふのは、今日の羅馬人が羅馬の古都を思ふやうな深刻な心持をいふのではない。寄席の見物人が手品師の技術を見るのと同じやうな軽い賛稱の意を寓するに過ぎない。西洋文明を模倣した都市の光景もこゝに至れば驚異の極、何となく一種の悲哀を催さしめる。此の悲哀は街衢のさまよりも寧ろこゝに生活する女給の境遇について、更に一層痛切に感じられる。君江のやうな、生れながらにして女子の羞恥と貞操の觀念とを缺いてゐる女は、女給の中には彼一人のみでなく、まだ澤山あるにちがひない。君江は同じ賣笑婦でも従來の藝娼妓とは全く性質を異にしたもので、西洋の都會に蔓延してゐる私娼と同型のものである。あゝいふ女が東京の市街に現れて來たのも、之を要するに時代の空氣からだと思へば時勢の變遷ほど驚くべきものはない。翻つて

自分の身を省れば、あの當時、法廷に引出されて贖職の罪を宣告せられながら胸中には別に深く愧る心も起らなかつた。是も亦時代の空氣のなす所であつたのかも知れない。月日はそれから二十年あまり過ぎてゐる。一時はあれほど喧しく世の噂に上つた此の親爺が、今日泰然として銀座街頭のカツフェーに飲んでゐても、唯一人これを知つて怪しむ咎めるものもない。歲月は功罪ともに此を忘却の中に葬り去つてしまふ。是こそ誠に夢のやうだと言はなければなるまい。松崎は世間に對すると共にまた自分の生涯に對しても同じやうに半ば慷慨し半ば冷嘲したいやうな沈痛な心持になる。そして人間の世は過去も將來もなく唯その日々の苦樂が存するばかりで、毀譽も褒貶も共に深く意とするには及ばないやうな氣がしてくる。果して然りとすれば、自分の生涯などはまづ人間中の最幸福なるものと思はなければならぬ。年は六十になつて猶病なく、二十の女給を捉へて世を憚らず往々青年の如く相戯れて更に愧る心さへない。この一事だけでも其の幸福は遙に王侯に優る所がある

だらうと、松崎博士は覺えず聲を出して笑はうとした。

君江は舞踊家木村義男と牒し合して、カツプエーを出てから有樂橋の暗い河岸通りで待合せ、自動車で三番町の千代田家といふ懇意な××へ行つた。そして松崎のをぢさんから教へられたやうに先へ歸る振りをして別の小座敷に姿をかくし、素知らぬ顔で清岡先生を迎えるつもりであつたが、車の道すがら話の様子で、君江は木村が案外さばけた男で、女給には戀人の二人や三人あるくらゐの事は當然だと思つてゐるらしいので、千代田家の裏二階へ通ると、すぐさま今夜の始末をその儘打ち明けてしまつた。すると、木村は案の定どこまでもおとなしく、
「始めから打明けてくれれば、こんな心配をさせなくつてもよかつたのに。許してくれたまへ。僕がわるかつたんだ。その代り今度都合のいゝ時ゆつくり逢つてくれ

たまへ。」

木村はわざと追立てるやうに君江をせき立て、手つだつて其の××××結んでやつた。

君江は始め邦樂座の舞臺で活動寫眞の幕間に出演する木村の技藝を見た時から例の好奇心に驅られてゐたので、このまゝ別れるのが物足りなくてしやうがない。木村の技藝といふのは彼自身雑誌や新聞などに書いてゐる議論によれば、露西亞の舞踊ニジンスキイ以後の藝術と、支那俳優の舞技と、即東西兩種の藝術を混和したとか稱するもので、男女兩性の肉體的曲線の動搖は、繪畫彫刻の如き靜止した造形美術の効果よりも遙に強烈で、又音楽が與へる直感的な暗示の力よりも更に深刻だといふのであるが、然し女給さんの君江にはさういふ審美學上の議論はどうでもよい。若い男と女とが裸體になつて衆人の面前で時々抱き合ひながらさまゝな姿態を示すのを見て、君江はあゝ云ふ事を商賣にしてゐる男と逢つて見たらばどんな

だらうと思つたのである。其の心持はあはすれた藝者が相撲を最頁にしたり、又女學生が野球選手を戀するのと變りがない。

「先生。もうおそいから眞直にお歸りぢやないんでせう。きつと何處かへお寄りになるのよ。口惜しいわねえ。」

「だつて、バトロンが来るんぢや仕様がないぢやないか。僕はすぐ家へ歸る。虚言だと思ふなら電話をかけて見給へ。」と名刺を渡して、

「君江さん。この次きつと逢つてくれるねえ。」

「あなたもよ。きつとよくつて。わたし何だかほんとに濟まないやうな氣がして、お歸ししたくないのよ。」と君江は例の如く新しい男に對する興味を押へる事ができないので、既に歸り仕度をしかけた木村の膝によりかゝつて其の手を握つた。

暫くしてから君江は木村の歸る自動車を頼まうと、女中を呼びに廊下へ出て、時間ときくと今方二時を打つた。そして清岡さんといふお客様はまだお見えにもなら

ず、又電話もかゝらないと言ふ。自動車が來たので舞踊家の木村先生はお歸りになる。小説家の清岡先生はそれなり二時半を過ぎてもお出でにならない。君江はカットフェーの仕舞際に瑠璃子といふ女給に市ヶ谷へ立寄つて傳言をするやうに頼んだのである。瑠璃子のもと洋髪屋の梳手をしてゐる時分から方々の待合へも出入をしてゐたので、かういふ事には抜目のあらう筈がない。事によると、清岡先生は瑠璃子の傳言を聞かない先に怒つて早く歸つてしまつたのかも知れない。さう思ふと君江は木村を歸すのではなかつたものと、いよゝゝ残り惜しくてたまらなくなつて來た。帯の間に入れた名刺を見ると、其の住處、昭和アパートメントの電話番号が記してあるので、前後の考もなく電話をかけて見やうと裏梯子を降りかけた時、表口の方で誰かお客の來たらしい物音がした。清岡先生にちがひないと、君江は耳をすまして表二階へ上る人の聲を聞くと、清岡ではなくて、思ひもかけない矢田さんらしい。矢田さんにはカットフェーのテーブルで、今夜はいくら誘はれても先約があ

るから裏通りのおでん屋麗々亭へは行かれないがその代り少しおそくなつてからならば、何處へでも行かれるから、行先を教へて先へ行つて待つてゐて下さいと虚言をついて、それなり××かしを食はしてしまふつもりであつたのだ。

矢田の方では君江のいふ事を眞に受け、最初の晩君江をつれて行つた神樂坂裏の待合へ行き、二時過ぎまで待ちあぐんでゐたが、電話さへかゝつて来ないので、矢田は形勢を察し、十日程前君江がカツプエーの行掛けに自分を連れて行つた三番町の千代田家の事を思合せて、萬一まぐれ當りにさがし當てたら、腹いせに騒いで邪魔をしてやらうと、突然自動車を乗りつけたのである。門をたゝくと直様女中が戸をあけたので、矢田は鎌をかけて君江さんとは聞くと、女中はてつきり君江の待つてゐる旦那だと思込んで、

「奥様は先刻からお待ちかねなんですよ。殿方はほんとに罪だわねえ。」といふ返事。矢田は煙に巻かれて何とも言へず、おとなしく二階へ上り、帽子もとらず床の

間を後に胡坐をかいて不審さうに座敷中を見廻してゐた。

君江は裏梯子の下で女中から様子を探し、今はどうする事も出来ないと思つて、いきなり座敷の襖をあけると共に、

「矢さん。あなた。あんまりだよ。」と鋭い聲で叱りつけた。

矢田は今方女中の返事に驚かされた後、又しても意外な君江の様子に、何とも言はず、目ばかりぱち／＼させてゐる。

「わたし、もう歸らうかと思つたのよ。」と君江はきちんと坐つて俯向いた。

「一體どうしたといふんだ。」と矢田は始めて心づいたらしく帽子を取り、「何だか、さつぱり譯がわからない。」

君江は俯向いたまゝ、黙つて膝の上にハンケチを弄んでゐる。女中が上り花を運んで来て、

「ほんとにお待ちになつて居らしたんですよ。お銚子をおつけ致しますせうか。」

「もう、おそう御在ますから。」と君江は妙に聲を沈ませて、

「こんなにおそくまで。ほんとに済みません。」

「おそいのは、もう馴れて居ります。それでは。どうぞ。」と女中は矢田の帽子と夏外套とを持って立ちかけるので、矢田は兎や角言ふひまもなく、案内されるがまま、先刻舞踊家のゐた座敷とも知らず黙つて裏二階の四疊半に入つた。

*

*

*

*

短夜の明けぎはにざつと一降り降つて来た雨の音を夢うつ、の中に聞きながら、君江は暫くうとくしたかと思ふと、忽ち窓の下の横町から、急に暑くなつたわねえといふ甲高な女の聲と小走りにかけて行く下駄の音とに目をさました。軒に雀の囀る聲。稍遠く稽古三味線の音。表の方でぱく掃除をする戸障子の音と共に、隣の屋根に洗濯物でも干しに上るらしい人の登音がする。雨はすつかり晴れて日が照り輝いてゐると思ふと、昨夜のまゝに電燈のついてゐる閉切つた座敷の中の蒸暑

さが一際胸苦しく、我ながら寢臭い匂ひに頭が痛くなるやうなので、君江は夜具の上から這ひ出して窓の雨戸を明けやうとした。矢田は既に昨夜の中わけもなく機嫌を直してゐた後なので、

「お止しよ。僕があける。實際暑くなつたなア。」

「こら。こんなよ。觸つて御覽なさい。」と君江は細い赤襟をつけた晒木綿の肌襦袢をぬぎ、窓の敷居に掛けて風にさらすため、四ツ匐ひになつて腕を伸す。矢田はその形を眺めて、

「木村舞踊團なんかより餘程濃艶だ。」

「何が濃艶なの。」

「君江さんの肉體美のことさ。」

君江は知らぬが佛とはよく言つたものだと思ひたくなるのをちつと耐へて、「矢さん。あの中に誰かお馴染があるんでせう。みんな好い身體してゐるわね。女が見て

さへさう思ふんだから、男が夢中になるのは當然だわねえ。」

「そんな事があるものか。舞臺で見るからいゝのさ。差向になつたらおはなしにならない。ダンサーやモデルなんていふものは、裸體になるだけが商賣なんだから、洒落一つわかりやアしない。僕はもう君さん以外の女は誰もいやだ。」

「矢さん。そんなに人を馬鹿にするもんぢやなくつてよ。」

矢田はまじめらしく何か言はうとした時、女中が障子の外から、「もうお目覚めですか。お風呂がわきました。」

「もう十時だ。」と矢田は枕もとの腕時計を引寄せながら、「おれは鳥渡店へ行かなくつちやならないんだけれど、君さん、今日は晩番か。」

「今日は三時出なのよ。暑くつて歸れないから、わたしその時間までこゝに寝てるわ。あなたもさうなさいよ。」

「うむ。さうしたいんだけれど。」と考へながら、「兎に角湯へはいらう。」

矢田は自分の店へ電話をかけ、どうしても歸らなければならぬ用事が出来たといふので、朝飯も食はず君江を残して急いで歸つて行つた。その時はかれこれ十二時近くなつてゐたが、今だに清岡の様子が変わらないので、君江は平素から頼んである表の肴屋に電話をかけ、間貸しのをばさんを出して様子をきくと、昨夜お友達達の女給さんが見えて、先生はその女と一緒に出来合つたのかも知れない。それで此方である。君江は事によると先生と瑠璃子と出来合つたのかも知れない。それで此方へは姿を見せないのだらうと思つた。然し唯さう思つただけの事で、君江はそれについて兎や角心を勞する氣にはならなかつた。十七の秋家を出て東京に来てから、この四年間に肌をふれた男の数は何人だか知れない程であるが、君江は今以つて小説などで見るやうな戀愛を要求したことがない。従つて嫉妬といふ感情をもまだ経験した事がないのである。君江は一人の男に深く思込まれて、それがために怒らねたり恨まれたりして、面倒な葛藤を生じたり、又は金を貰つたゝめに束縛を受けた

りするよりも、寧ろ相手の老弱美醜を問はず、その場かぎりの氣まゝな×××××
 にした方が後くされがなくて好いと思つてゐる。十七の暮から二十になる今日が日
 まで、いつもくく君江はこの×××のいそがしさにのみ追はれて、深刻な戀愛の眞情
 がどんなものかしみく考へて見る暇がない。時たま一人貸間の二階に寝ることが
 ないでもないが、さういふ時には何より先に平素の寢不足を補つて置かうといふ氣
 になる。それと同時に、やがて勞疲の恢復した後おのづから來るべき新しい×××を
 豫想し始めるので、いかなる深刻な事實も、一旦睡に陥るや否や、其の印象は睡眠
 中に見た夢と同じやうに影薄く模糊としてしまふのである。君江は睡からふと覺め
 て、いづれが現實、いづれが夢であつたかを區別しやうとする、其時の情緒と感覺
 との混淆ほど快いものはないとしてゐる。

此の日も君江は此の快感に沈湎して、轉寢から目を覺した時、もう午後三時近く
 と知りながら、猶枕から顔を上げる氣がしなかつた。枕もとを見れば、昨夜脱ぎ捨て

た着物や、解きすてた帶紐に取亂されてゐる裏二階の四疊半は、昨夜舞踊家の木村
 が歸つた後、輸入商の矢田が來て、今朝方歸りがけに窓の雨戸一枚明けて行つたま
 まで、消し忘れた天井の電燈さへ亦昨夜と同じやうに床の間の壁に挿花の影を描い
 てゐる。懶い稽古唄や物賣の聲につれて、狭間の風が窓から流れ入つて疊の上に投
 げ落した横顔を撫る心地好さ。君江は今かういふ時、矢田さんでも誰でもいゝから
 來てくれ、はい、さうすれば有りとあらゆる身内の×××××かけてやらうもの
 をと思ふと、いよく湧起る妄想の遺瀨なさに、君江は軽く臉を閉ぢ、われとわが
 胸を腕の力かぎり抱きしめながら深い息をついて身をもだへた。其時靜に襖の明く
 音がして、屏風の前に立つた男の姿を、誰かと見れば昨夜から名殘惜しく思つてゐ
 た木村義男である。

「あら。」と君江はわづかに顔を擡げながら、起直りもせず、×××××××××××
 ×××

たのよ。」

暫くして後木村は昨夜銀細工の鉛筆を落したから、もしやと思つて探しに來たことを告げた。

二人は起きて、表座敷で料理の肴に箸をつけた時、女給の瑠璃子から電話がかつた。瑠璃子は昨夜君江から頼まれた通り、狼狽した振りでも本村町へ行き、清岡先生に三番町の干代田といふ家へ行つた事を告げると、先生は俄に不快な顔色をして、いろ／＼辯解するのも聽かず、途中から自分を振捨てどこへか行つてしまつた。其事を知らせたいと思つて今まで君江の來るのを待つてゐたが、三時の出番にも姿が見えないので、最初に肴屋へ呼出しの電話をかけ、をばさんの返事から推量して、更に電話をかけて見たといふ事である。

日が暮れて飯を食べてしまふと、木村は明日□□劇場の初日なので、これから稽古に行かなくてはならないと、急いで仕度をした後、特等の座席券を五六枚、カツフ

エーの女給さん達に賣つてくれと頼んで、其儘晩飯の代も自動車賃も拂はずに歸つてしまつた。

君江はまるで落語家か藝人など、遊んだやうな氣がして、俄に興が覺め、折角けふ一日夢を見てゐたやうな心持はもう消え失せてしまつた。折からたつぷり日が暮れると共に、今のところ何の當もない今夜一晚の事が急に物さびしく思はれて來た。女一人では××にも居られないので、木村の飲み食した勘定を仕拂つて外へ出ると、横町は丁度座敷へ出て行く藝者の行來の一番急しい時分。今頃おくれてカツプエーへも行かれない、と云つて、家へ歸つても仕様がなないので、思出すまゝ桐花家の京葉をたづねて見やうと、四角を曲りかけた時、向から座敷着の袂を取り、赤い襦袢の裾を夕風に翻しながら來かゝる一人の藝者。見れば京葉である。

「君ちゃん。これから銀座？」
「もう晩くなつたから休まうと思つてゐるの。」

「あなた。千代田家さんに居たんぢやないの。」

「あら。どうして知つてるの。」

「どうしてぢや無いことよ。君ちやん。あすこはいけないよ。昨夜わたし清岡先生にもお目にかゝつたのよ。」

「あら。さう。」と君江もさすがに目をみはつた。

「ゆうべ、宵の中に野田家さんでお目にかゝつたのよ。三四人お連があつたわ。わたしは後口で廻つて行つたもんだから、鳥渡お目にかゝつたばかりなのよ。だから、その時にはどなただか氣がつかかなかつたのよ。だけれど、わたしお連の方に出たもんだから、後ですつかり話をきいてしまつたのさ。お前さんがちよいと千代田家さんへ行くことを能く知つてゐる藝者衆があるんだよ。家が都合つてゐるものだから、窓からよく見えるんだとさ。お座敷でその藝者衆が先生とは知らずにお前さんのはなしをしたんだとさ。何しろ此處ぢやはなしができないから、わたし明日かあ

さつて、をばさんにも用があるから、ゆつくり行つて話をするわ。兎に角あすこはよした方がいゝよ。」

「さう。そんな事があつたの。ぢや待つてるわよ。」

近處の犬だの、箱屋だの、出前持だの、藝者などが、絶え間なく通過るので、二人は立談もそこ〜に右と左へわかれた。

八

良人の起るのは大抵正午近くなので、鶴子は毎朝一人で牛乳に焼麩麩を朝飯に代へ、この年月飼馴らした鸚鵡の籠を掃除し、盆栽に水を灌ぎなどした後、髪を結び直し着物をきかへて、良人の起るのを待つのである。その日の朝牛乳と共に女中の持つて来た郵便物の中に、番地も宛名も洋字で書いた一封があつたので、何心なく手に把ると、自分へ宛てたもので、その筆蹟にも見覚えがある。女學校を卒業する前

後二年あまり教を受けた佛蘭西の婦人マダム・シユールの手紙である。

マダム・シユールは東洋文學研究の泰斗として各國に知られてゐる博士アルフホ
ンズ・シユールの夫人で、始め良人に従ひ支那に遊ぶ事十餘年、日本に留ること又
更に數年にして一度本國に歸つたが、その後良人に先立れ孀婦となつた悲しみを慰
めるため、單身米國を漫遊して再び日本に来て二年ほど東京に居た。鶴子が女學校
の友達二三人と語學と禮法とを學びに通つたのは此の折であつた。マダムシ・ユ
ールは巴里で亡夫の遺著を出版するについて至急な用事が出來たので、四五日前また
もや日本に来て、帝國ホテルに投宿したから一度訪ねて來るやうにといふのであつ
た。

鶴子は進の起るのを待ち丁度正午の汽笛が鳴つた頃、電話で聞合せてホテルへ往
つた。

マダム・シユールは西洋の老女にはよく見るやうな圓顔の福々しく頬の垂れ下つ

た目の細い肥つた女である。日常の日本語は勿論不自由なく、漢文も少しは讀める。
説文で字を引く事などは現代日本の學生の及ばぬところかも知れない。

丁度食事の頃だつたので、マダムは畫餉のテーブルに鶴子を案内して、亡夫の遺
著を編輯するについて、第一に社寺又は古器物の寫眞の不足してゐるのを補ふため
に之を買集める事、第二には佛蘭西の本邸に儲へてある東洋の書畫載籍の整理を依
嘱するため適當な日本人をさがして本國へ同行したいといふ事を語つた。

鶴子はどの位學識があればよいのかと問ふと、別に専門の學者を望んでゐるので
はない。譬へば和歌と端唄との區別を知つてゐる位の程度でよいのであるが、學問
よりも寧ろ日本固有の趣味と鑑識とを具備した人で、旁幾分なりと佛蘭西語を知つ
てゐれば申分はないのだといふ。マダムは猶言葉をづけて、

「半年ぐらゐで仕事はすみます。あなたがお一人で遊んでお居でましたら、是非と
もお頼みするのですけれど、今ではそんなわけには行きませんから、誰か御存じの

方をさがしていたゞかなければなりません。」

この言葉を聞くと共に、鶴子は食卓を押し出さんばかり、殆我を忘れて半身を突き出し、「わたくし、半年や一年ぐらゐなら……わたくしのやうなものでもお役に立ちますのなら、どんな都合をしても御一緒に参りたいと存じます。」

「あなた。おいでになれますか。」とマダムも驚きと喜びとに其の目を見張つた。

「一度はどうかして洋行して見たいと思つてをりましたから。」と鶴子は一時に湧起る感情を見せまいとして努めて聲を沈ませた。

鶴子は今朝マダム・シユールの手紙を受取り、此のホテルに来て食卓の椅子にづく時まで、自分の生涯にかくの如き大變動が起らうとは夢にだも思つてゐなかつた。運命ほど測りがたいものはない。鶴子はマダム・シユールの談をきいてゐる中、突然何物かに誘惑せられたやうに、唯ふら／＼と遠いところへ往きたくなつたのである。往つた先の事はよかれあしかれ、鶴子は今住む家の門を出る事が自分の生涯

をつくり直す手始だと日頃から心づいてはゐたもの、けふが日までこれを断行する機会がなかつた。一時は深く絶望して何事も皆自分が爲した過の報いとのみ思ひあきらめ、一日も早く年をとつて、半生の悔ひと悲しみを茶のみばなしにする日の来る事を待つより外はないと思つてゐたが、今突然意外な機会が目の前に現はれて来たのを見ては、兎角の思慮を費す暇もない。日頃因循してゐたゞけ、障碍が起つたなら、極力これを排斥して思ふところを決行しやうといふ元氣さへ出て来たやうな心持になつた。

食事の後廊下の長椅子に並んで腰をかけ珈琲を啜りながら、懇談すること又一時間ばかり。鶴子はホテルを出て梅雨晴の俄に蒸暑くなつた日盛りをもいとはず、日比谷の四辻から自動車を借つて世田ヶ谷に往き良人の老父をたづねて、洋行のはなしをすると、老父は曾て大學教授のころ兩三度シユール博士に面談した事があると云つて、「あつちへ行つてから書物の事で何かわからない事があつたら遠慮なく手紙

で間合せるがよい。」と云ふやうな次第であつた。鶴子はいよく門出の幸あるを喜び、夏の夕陽のまだ照り輝いてゐる中、急いで家へ歸り良人の承諾を求めやうと思ふと、良人は既に外出した後で、その夜十二時近くなつてからいつものやうに今夜は晩くなるから先へ寝てくれるやうにとの事であつた。仕様がなないので、鶴子は其の夜は先に寝て、翌朝は良人の起るまで待つてゐるわけにも行かないところから、マダム・シユールから依頼された用事のある事だけを一筆認めて、再びホテルへ出かけた。マダムは次の日に京都へ行き奈良に遊び、二三日長崎に滞在して神戸に立戻つて便船を待つつもりであるから、其日までに仕度をして其の地のホテルへ来てくれるやうにと、日割を明細に書いて見せてくれた。そして鶴子が旅行免狀の事は至急運びがつくやうに大使館から直接其筋の役所へ交渉して貰ふ手筈だと云ふ事であつた。

鶴子が良人に逢つて始めて洋行の事を打明けたのは次の夜も世間は既に寢靜つた

頃であつた。進はどこかで飲んで來た酒の酔も一時に醒める程驚いたらしいのを、わざとさり氣なく、

「さうか。それは結構だ。行つて來るがい。」

「半年といふ約束で御在ますけれど、都合でもつと早く歸りたいと思つて居ります。」

「別に急いで歸るにも及ばない。二度出掛けるのも大變だから、ゆつくり勉強したり見物したりして來る方がい。」

二人のはなしはそれなり途切れてしまつた。進は鶴子が洋行する胸中を推察して今更引留めても既におそいと思つたので、未練らしい様子を見せて、「それ御覽なさい。その位なら平素からもう少し大事にしてくれ、ばよいのに。」と思はれるのが無い。念である。さうかといつて、「お前のゐなくなるのを待つてゐたのだ。」と思はせる程冷靜な態度を取るのも、却て腹の底を見すかされるやうな氣がする。いづれともつか

ぬ曖昧な態度を取るに若くはない。とさう考へたのは、鶴子の身になつても矢張同じことであつた。あまり名残を惜しむやうな様子を見せて、無理に引留められても困るし、と云つて、あまり冷淡にして、それがため輕薄無情な女だと思込まれるのは元より好むところでない。夫婦は互に顔色を窺ひ、できるかぎり眞實の事情には觸れないやうにして、平和に體よく此場をすませてしまひたいと心掛けたのである。

一週間ばかりの後、鶴子は夕方神戸急行の列車に乗つた。始め進の友人間には送別會を催すやうなはなしが起らないでもなかつたが、鶴子は實家へ對して新聞などに自分の名が出るやうな事は成るべく避けたいからと云つて固く辭退したので、其夕東京驛まで見送りに行つたものは、良人の進と門生の村岡と、書生の野口といふ男の外には、鶴子の學友でいづれも相應のところへ嫁してゐるらしい婦人二三人だけであつた。實兄は窃に旅費を贈つてもいゝといつた程好意を持つてゐたが、世間を憚つて見送りに行かず、世田ヶ谷の老人も亦頽齡を云ひわけにして出て來なかつ

た。

列車が出發すると、進を始め男二人と婦人達とは自然別々になつてプラットホームを降口の方へと歩みはじめたが、村岡一人はいつまでも帽子を片手に列車の行衛を見送つたまゝ立つてゐる。進は見返りながら、

「おい。村岡。何をぼんやりしてゐるのだ。」

「實にさびしい出發でしたな。」と村岡は既に人影のなくなつたプラットホームを見廻しながら初めて歩み出した。

「彼の女の生活もこれで第一篇の終を告げたのだ。」と進は吸ひかけの巻煙草を線路の方へ投捨てた。

「でも、半年たてばお歸りになるんでせう。」

「いづれ歸るだらう。然し恐らく僕の家へは歸つて來ないだらう。」

「先生。僕も實はさういふ氣がしたんです。一種の暗示ですね。」

「おい。村岡。君はどうして彼女のツバメにならなかつたんだ。おれには能くわか
つてゐた。彼女は君のやうな感傷的な比較的純潔な青年を要求してゐたんだせ。」
村岡はまだ三十にはならない青年なので、顔を眞赤にして、「先生。そんな冗談を。
うそですよ。そんな事は。」

「は、は、は。歸つて來てからでも遅くはあるまい。」と進は始めて面白さうに笑つ
た。

改札口へ來かゝると俄に混雑する人の往來に、談話もそのまゝ、三人は停車場の
外へ出た。吹きすさむ梅雨晴の夜風は肌寒いほど冷である。

「おい。野口。まだ早いから活動でも見て歸るがい。こゝに招待券があるから。」
と進は書生を遠ざけてから、村岡と連立つて丸ビル下の往來をぶら／＼當てもなく
歩いて行く。村岡は突然思出したやうに、

「先生。ドン・フワンはあれつきりなんですか。」

「うむ。すこし考へてゐることもあるから。」

「どんな事です。」

「さア、別にまだはつきりした考もないんだがね。しかし君にはもう心配させない
つもりだから、それだけは安心してゐたまへ。君はあんまり善人過るから。」

「さうでせうか。」

「どうかすると、まるで田舎の老人見たやうな事を言ふからな。」

「それでも、僕には君江さんはそんなに憎むべき女だとは思はれないですよ。」

「君は傍觀者だからさ。僕だつてそれほど深く憎んでゐるわけでもない。唯癩にさ
はるんだ。復讐だとか報復だとかいふ程深い意味ぢやない。唯すこしいぢめてやら
うと思つてゐるんだ。僕の考へてゐる事をはなしたら、君はきつと残酷だとか人道
にはづれてゐるとか言ふにちがひない。」

「どんな事です。」

「君を信用しないわけではないが、今話をするわけには行かない。」
「警察へ密告でもすると云ふんですか。」

「ばかな。そんな事をしたつて、あいつは何とも思やしない。拘留された所で二三日たてば出て来る。女給でなくつてもあいつのする事はまだ澤山ある。僕はあいつが何もする事ができなくなるやうにしてやりたいと思つてゐるんだ。それもおれが自身に手を下さずに、自然に他の人が手を下さやうな、さういふ機會をつくらせやうと思つてゐる。は、は、は。これは僕の空想だよ。イヤ、僕はかういふ男の心理状態を小説に見たいとこの間から苦心してゐるんだ。たしかバルザックの小説に在つたはなしだと思ふ。欺かれた男が密夫の隠れた戸棚を密閉して壁を塗つて、その前で姦婦と酒を飲むはなしがある。僕の空想したのは、……僕の書かうと思つてゐるのは、女を裸體にして自動車から銀座通りのやうな町の上に投げ出してやりたい。日比谷公園の木の上に縛りつけて置くのも面白い。昔は不義の男女を罰するた

めに日本橋の袂に晒して置いた。それと同じやうな事さ。どうだらう。今の讀者には受けないか知ら。」

村岡は進が眞實小説の腹案を語るのやら、又は戯に自分をからかふのやら、或は又小説に托して君江に對する報復の手段をそれとなく語るのやら、その區別がつかない。唯何となく薄氣味がわるく、總毛立つやうな氣がするばかり。やつと氣を取直して、

「い、でせう。甘つたるい場面にはもう飽きてゐる時ですから。」

「女が戀人と寝てゐる處へ放火するのも面白いだらう。亂れた姿で外へ逃げ出すところを、火事場騒ぎにまぎれて女をつかまへ、どこか知らない處へつれて行つて思ふさま侮辱を興へる……。」

「成程……。」

「まだ考へてゐる事がある……。」

「先生。もう止してください。何だか變な心持になるから、もう止してください。」

「暴風になりさうだな。今夜は。」

空は眞暗に曇つて、今にも雨が降つて來さうに思はれながら、烈風に吸きちぎられた亂雲の間から星影が見えてはまた隠れてしまふ。路傍の新樹は風にもまれ、軟かなその若葉は吹き裂れて路の面に散亂してゐる。唯さへ夜になれば人通りの絶勝ちな丸の内の道路は、此の風と此の闇とに一際物寂しく、屹立する建物の間の小路から突然追剥でも出て來はせぬかと思はれるやうな氣がする。

「帝劇の女優が樂屋から歸り道に、車から引ずりおろされて脚を斬られたことがあつた。犯人はわからずじまひだ。」

「さうですか。そんな事が在つたんですか。」

「寢てゐる中に黴菌をなすりつけられて盲目になつた藝者もある。君江のやうな女は最後にはきつとさういふ目に遇ふだらう……。」

突然進がアツと叫んだので、村岡はびつくりして寄添ふと、横合から吹つける風に、進は高價なバナマ帽子を奪ひ去られたのであつた。

知らず／＼日日新聞社の近くまで歩いて來たので、二人は稍々疲れたまゝ、その邊の小さなカッフエーに小憩みして、進はウイスキー村岡はビール一杯を傾け、足の向くまゝ銀座通へ出た。村岡は別れて歸らうとするのを清岡は無理に引留め、今夜は顔を見知られてゐない裏通りのカッフエーを観察しやうと言出して、つゞげざまに五六軒飲みあるいた。どの店へ入つても四五盃づゝウイスキーばかり飲みつゞけるので、いつも強酒の清岡も今夜は足元が大分危くなつた。それにもかまはず又しても通りすがりのカッフエーへ這入らうとするので、村岡は清岡の袖を捉えながら、

「先生。もう止しませう。カッフエーよりか、どこか外の處へつれて行つて下さい。僕はもうくたびれてしまひました。」

「一體何時だ。」

「もう十二時です。」

「もうそんな時間か。」

「だから、もうカツフェーはつまりませむ。」と村岡は兎に角酔つて清岡が此の邊を徘徊してゐる事を危険に思ひ、それよりもどこぞの待合へでも上つた方がまだしも安全だと考へて、「先生。もつとゆつくりした處で靜に飲み直ませうよ。」

「うむ。君もなか／＼話せるやうになつた。何處でもいゝ。好きなところへ連れて行け。」

「ぢや、先生、車に乗りませう。」と村岡は早速清岡の袖を引張つて、土橋へ通する西銀座の新道路へ出やうとした。

「待て待て。」と清岡は眞暗な建物の壁に向つて立小便をしはじめたので、村岡は少し離れて曲角に立留つた時、女給らしい女が三人つれ立つて、摺れちがひに通るか

かつたのをふと見ると、其の中の一人はドン・フワンの君江である。君江の方でも村岡の顔を見て、アラとかオヤとか言つたらしかつたが、その聲はまだ吹きやまぬ烈風に吹き去られて聞えなかつた。村岡は咄嗟の間に、先刻丸の内を歩きながら清岡が言つた事を思出し、何とも知れぬ恐怖を感じて、首と手を振つて早く行けと知らせた。いつになく亂酔した清岡が、人通のないこの裏通りの角で突然君江の姿を見たら、何をしだすか知れない。新聞紙を賑すやうな騒ぎを引起しては大變だと心配したのである。

君江は村岡の心を察したのか、どうか分らぬが、そのまゝ通り過ぎて、三人連で向側の蕎麥屋へ這入りかけた時、丁度長小便をし終つた清岡はひよろ／＼と歩み出で、向を眺めながら、「どこの女給だ。おれが行つておごつてやらう。」

村岡は驚いて袖にすがり、「およしなさい。變な男がついて居るやうです。」
「かまうものか。おごつてやるんだ。」

「先生。およしなさい。」と村岡は力のかぎり抱き留めながら、通り過る圓タクを呼留めた。この騒ぎに気がつかずにいるが、風に雑つていつの間にも霧雨が降り出してゐたと見え、村岡は車に乗つてから窓の硝子の濡れてゐるのに心づいた。

蕎麥屋を出てから自動車に乗つたのは瑠璃子、春代、君江の三人であつた。瑠璃子が赤坂一ツ木で先に降り、次に春代が四谷左門町で降りると、運転手は豫め行先を教へられてゐるので、鹽町の電車通りから曲つて津の守阪を降りかけた。小雨のふり出した深夜のことでは人通りはない。君江は酔つてゐるので、一人になると急に眠くなつて覺えず臉を合せたかと思ふと、突然君子さんと呼ぶ男の聲。びつくりして気がつくといつと自分を呼んだのは見も知らぬ運転手である。いやな奴だと思ひながら、大方女給同志の話から聞知つて冗談を言ふのだらうと、氣にも留めず、「もう本村

町なの。」

運転手はゆる／＼車を進めながら、「初めから君子さんにちがひないと思つてゐたんですよ。忘れましたか。諏訪町の加藤さんで二三度お逢ひしました。」と烏打帽をとり振返つて顔を見せた。

諏訪町の加藤といふのは今富士見町に出てゐる京葉の事なので、君江はそこで知つてゐると云ふからには二度や三度出たお客にちがひないと思ひながら、その顔はとうに忘れ果て、思ひ出せない。日頃君江はカッフェーの人中で、若しその時分のお客と顔を見合せた場合、自分の取るべき態度については豫め考へてゐないこととはなかつた。然し東京はさすがに広いもので、半年近くも稼ぎ廻つてゐたにも係らず、銀座のカッフェーへ出てから今日まで一人もその時分のお客には出逢はなかつたので、月日と共に一時の用心もおのづから忽せになつた時、今夜突然、自分の乗つてゐる車の運転手から呼び掛けられ、君江はさすがにびつくりはしたものの、

知らぬ顔で押通すに若くはないと思定め、

「人ちがひでせう。知らないわ。わたし。」

「君子さんの方ぢや、お忘れになるのも無理はありませんよ。圓タクの運轉手にま
でなり下つてる始末だから。然し君子さん女給になつたからつて、何もさうお高く
とまるに及ばないでせう。女給も高等も内實に於ては變りはないんでせう。」

「下してよ。こゝでいゝから。」

「雨が降つてゐます。お宅まで是非送らせて下さいな。」

「いゝのよ。迷惑よ。」

「君子さん。あの時は十圓だつたね。」

「下せつて云ふのに、何故下さないんだよ。男が怖くつて夜道が歩けるかい。馬鹿
ッ。」

君江の威勢に運轉手は暴力を出しても駄目だと思つたのか、その儘おとなしく車

を駐めると、折からざつと吹掛けて來た驟雨に傘の用意のないのを、さも好い氣味
だと云はぬばかり。手を伸して内から戸を明け、

「こゝでいゝなら。お下りなさい。」

「一圓こゝへ置きますよ。」と君江は五拾錢銀貨二枚を腰掛の上に投出して、戸口か
ら降りやうとするその片脚が、地につくかつかぬ瞬間を窺ひ、運轉手は突然急速力で
車を進めたので、君江はアツと一聲。でんぐり返しを打つて雨の中に投げ出された。
「さまア見ろ。淫賣め。」と冷罵した運轉手の聲も驟雨の音に打消され、車は忽ち行
衛をくらましてしまつた。

君江は氣がついて泥の中に起直つて、あたりを見ると、投出された場所は津の守
阪下から阪町下の巡查派出所へ來る間の眞暗な道だと思ひの外、まるで方角のわか
らない屋敷町の塀外であつた。自動車も通らなければ無論人影もない。足を曳摺り
ながら、石の門柱についてゐる灯の下に歩み寄り、塀外へ枝を伸した椎の葉かげを

せめての雨やどりに、君江はまづ泥と雨とに濡れくづれた髪の毛を束ね直さうと、額を撫でながら其の手を見ると、べつたり血がついてゐる。君江は顔の血に心づく
と俄に胸がどきどき鳴出して、髪や着物にかまつてゐる氣力は失せ、聲を出して救
ひを呼ばうとしたのを纒に我慢して、唯一心に醫者が薬屋かを目當に雨の中を馳け
出した。

九

市ヶ谷合羽坂を上つた薬王寺前町の通りに開業してゐる醫者が應急の手當をして
くれた上に、自動車まで頼んでくれたので、君江は雨の夜もいつか明くなりかけた
頃、本村町の貸間へ歸つて來た。顔と手足との疵はさほどの事もなかつたが、長い
間着のみ着のまゝぐつすり雨に濡れてゐたので、夜明から體温は次第に昇つて、攝
氏四十度を越え、夕方になつても一向下りさうもない容態に、醫者は窒扶斯か、肺

炎でも起さなければよいがと、貸間の老婆にも注意して行つたが、幸にしてそれ
ほどの事もなく、三日目には入院の沙汰も止み、一週間目には布団の上で起き直つ
てもいゝやうになつた。

君江は事實を知らせると、大勢見舞ひに來るのが煩さいのみならず、××の噂が
立たないとも限らないと思つて、カツプエーへは唯風邪をひいた事にして置いたの
である。八日目の午後になつて、春代が初めて見舞に來たが、その時には額の繃帶
は既に除かれてゐたので、疵の痕はその晩路地で轉んだことに云ひまぎらしてしま
つた。次の日には瑠璃子が來たが、これも風邪の重いのに罹つたのだと思ひ込んで
歸つた。體温は既に平生に復し食慾もついて來たが、腰や手足の打身はまだ直らず、
梯子段の上り下りにもどうかすると痛みを覺えるくらゐである。間貸の婆は市ヶ谷
見附内の何とやらいふ薬湯がいゝと云ふので、君江はその日の暮方始めて教へられ
た風呂屋へ行き、翌日は兎に角少し無理をしても髪を結はうと思ひさだめた。

湯から歸つて來ると、郵便が届いてゐる。状袋には署名がないが、讀んで行く中に清岡の門人村岡の手紙である事がわかつた。

「私は直接あなたに手紙を上げていゝかどうかを一度考へた後にこの手紙を書きました。何故ならば、先生が之を知つたなら、先生と私との今までの關係は必斷滅するだらうと思つたからです。私は然しながらあなたが十分に秘密を守つて下さるだけの好意を私の爲に持つてゐられる事を信じて、そして私はこの手紙をかきました。あなたは御存じかどうか知りませんが、先生の令夫人は突然先月の末に或外國の婦人と一緒に日本を去られました。先生はこの別離については何等の感激をも催さないやうに粧つて居られますが、然し現はれたる事實が凡てを打消してゐます。其の後十日ばかりの間に於ける先生の生活は飲酒と放蕩とのために俄に俄にすすんで行きかけてゐます。この場合、現在とそして將來に於ける先生の生涯を慰める力のあるものは、君江さん、あなたの愛より

外にはないものと私は信じてゐます。尤も先生はあなたの名をさへ今では私達の前では發音することを避けてゐられます。避けてゐられるだけ、それだけ、私は先生の心の底にあなたの事がまだ眞實消去らずにゐるものと推察するので、先生は令夫人を失つた原因を或はあなた一人の上に塗りつけやうとしてゐるのではないかと疑はれることがある位です。私は去年からの凡ての秘密をあなたに打明けなければなりません。私はあなたに向つて、先生の心の底に去年から絶えず蠢いてゐる報復の企をお知らせする事を敢てするのは、あなたと先生との間を遠くさせるためではなく、却て先生が此の如き殘忍性を感じた程、いかにあなたを愛しつゝあるかを、私はあなたに向つてお知らせしたい誠實さからなのです。先生は二三日中に□□發行所主催の文藝講演會で講演をされるため仙臺から青森の方面へ旅行されます。今年の夏はどこか東北の温泉場で避暑すると云はれるので、私も之を機會に、久しく郷里の地を踏みませんから、

先生をお見送りしてから暫く東京を去るつもりでゐます。その前に一度お逢ひしたいと思つて、實は昨日一人でドン・フワンへ行つて見ました。そしてあなたが御病氣で寝ておゐるのだといふ事を聞いたのです。私は寧ろあなたが此の數日間病氣のために外出されなかつた事を祝福しなければなりません。私は唯それだけを言ふに止めて置きます。その理由を明言する事を躊躇してゐると言つたら、あなたは直に凡てをお察しなさるだらうと思ひます。それでは、今年の秋風が丈の高くなつたコスモスの莖をゆり動す頃まで、私は田舎に行つてゐませう。夜の涼しさに銀座の賑ひが復活する時分、またお目にかゝるのを樂しみにしてゐませう。七月十日。」

君江は手紙の日附を見て、初めて七月になつたのに心づいたやうな氣がした。それと共に、わづか十日とはたゝぬ先夜の事がもう一月も二月も前のやうな氣がして、それ以來長らく枕についてゐたやうな心持もした。兎に角一年あまり毎日通馴れた

カッフエーへ行かない事だけでも、境遇が一變してしまつたやうな心持がするのに、時節も丁度その日入梅があけて、空はからりと晴れ晝の中は涼風が吹き通つてゐたが夕方からはつたり歇み、坐つてゐても油汗が出るやうな蒸暑い夜になつた。小家の建込んだ路地裏は昨日までの梅雨中の静けさとは變つて、人の話聲やら内職のミシンの響などが俄に騒々しく聞え始め、路地の外の裏通りにもラヂオを始め、何といふ事なくいろいろな物音がしてゐる。君江はをばさんに呼ばれて下へ行き夕飯をすますと、洗髪のみ、薄化粧もそこ〜に路地を出た。家にゐると毎晩のやうにをばさんに話し込まれるのがうるさいのみならず、俄に眞夏らしくなつたあたりの様子に、唯何ともつかず散歩したくなつたからである。出しなに鏡臺の曳出しから臺口を取出す時、村岡の手紙が目についた。一緒に帯の間に挿込んだ。半分からは夕飯に呼ばれたのと夜になりかけた窓の薄暗さに拾ひ讀みをしたばかりなので、君江はぶら〜堀端を歩みながら、どこか静かな土手際で電燈の光の明い處でもあつたら

う一度読み直さうといふ氣もしたのである。然し電車と自動車の往復する堀端は、新見附の土手へ来るまでは手紙を讀返す事のできるやうな處もなかつた。行手に牛込見附の貸ボートの灯が見え、二三人女學生風の女が見附の柵に腰をかけて涼んでゐたので、君江は鳶の葉つなぎの浴衣のさして目にたゝぬを好い事に、少し離れた處に佇立んで、束ねた洗髪を風に吹かせながら、街燈の光に手紙を開いて見た。君江には手紙の文體が學生の艶書と同じやうに氣障にも思はれるし、又翻譯小説でも讀むやうにまはりくどくて、どうやら氣味のわるい氣はしながらも、事實と文飾との境がはつきりしないのである。君江は手紙の意味を手短に言つてしまへば、清岡先生はわたしを二號同様にしてゐた爲に奥さんに逃げられたのだから、そのつもりでどうかしなければいけない。此のまゝ知らない顔をしてゐれば、清岡先生はやけ半分、何か仕返しをしないと限るまい。どうか、さういふ事のないやうに氣をつけてくれといふやうな事になると考へた。そして隨分譯のわからない無理な事を言

ふ人だと腹立しい心持になつた。

君江は暫くしてこの手紙は村岡の心から出たものではなく、内々清岡さんに言はれて書いたものではないかと、氣がついて見ると、あの晩西銀座の蕎麥屋へ這入りかけ、意外な處で村岡に出逢つた時の様子から思合せて、自分が車から突落されたのも、事によると清岡さんの教唆から起つた事かも知れない。君江は突然襟首に寒さを覺えるやうな恐怖と共に、ナニ、先が先なら此方も此方で負けてゐるものか。どうでも勝手にするが、いと云ふやうな心持になつた。

あまりいつまでも同じところに立つてもゐられないので、君江は考へて見附を越えると、公園になつてゐる四番町の土手際に出たまゝ、電燈の下のベンチを見附けて腰をかけた。いつも其邊の夜學校から出て來て通り過る女にからかふ學生もゐないのは、大方日曜日か何かの故であらう。金網の垣を張つた土手の眞下と、水を隔てた堀端の道には電車が絶えず往復してゐるが、其の響の途絶える折々、暗い

水面から貸ボートの静な櫂の音に雑つて若い女の聲が聞える。君江は毎年夏になつて、貸ボートが夜毎に賑かになるのを見ると、いつもきまつて、京子の圍はれてゐた小石川の家へ同居した當時の事を憶ひ出す。京子と二人で、岸の灯のとゞかない水の眞中までボートを漕ぎ出し、男ばかり乗つてゐるボートにわざと突當つて、それが手がりに誘惑して見た事も幾度だか知れなかつた。それから今日まで三四年の間、誰にも語ることもできない淫恣な生涯の種々様々なる活劇は、丁度現在目の前に横つてゐる飯田橋から市ヶ谷見附に至る堀端一帯の眺望をいつも其の背景にして進展してゐた。と思ふと、何といふわけもなく此の芝居の序幕も、どうやら自然と終りに近づいて来たやうな氣がして来る……。

火取蟲が礫のやうに顔を掠めて飛去つたのに驚かされて、空想から覺めると、君江は牛込から小石川へかけて眼前に見渡す眺望が急に何といふわけもなく懐しくなつた。いつ見納めになつても名残惜しい氣がしないやうに、そして永く記憶から消

失せないやうに、能く見覺えて置きたいやうな心持になり、ベンチから立上つて金網を張つた垣際へ進寄らうとした。その時、影のやうにふら／＼と樹蔭から現れ出した男に危く突き當らうとして、互に身を避けながらふと顔を見合せ、

「や、君子さん。」

「をぢさん。どうなすつて。」と二人ともびつくりして其儘立止つた。をぢさんといふのは牛込藝者の京子を身受して牛天神下に圍つてゐた旦那の事である。君江は親の家を去つて京子の許に身を寄せた時分、絶えず遊びに来る藝者達ををぢさん／＼と云ふのをまねて、同じやうにをぢさんと呼んでゐた。本名は川島金之助といつて或會計の株式係をしてゐたが遣ひ込みの悪事が露はれて懲役に行つたのである。その時分は結城づくめの凝つた身なりに藝人らしく見えた事もあつたが、今は帽子もかぶらず、洗ざらした手拭地の浴衣に兵児帯をしめ素足に安下駄をはいた様子。どうやら出獄してまだ間がないらしいやうにも思はれた。

川島は手拭浴衣の襟を寒さうに引合せ、「このざまちやア、どうも斯うも有つたものぢやない。むかしはむかし今は今だ。」と取つて付けたやうに笑ひながらも、絶えずそれとなく四邊に氣を配つてゐるらしく、何とつかずそはくしてゐる。年はその時分既に四十五六になつてゐたが、白髪もさして目につかず、中肉中丈の後姿は若い妾とつれ立つて散歩に出かける時などは、随分様子はい、血氣盛の男に見まがふ程であつたが、今見れば、妙に黄ばんだ顔一面、えぐつたやうな深い皺がで、蓬々とした髪の毛の白くなつたさまは灰か砂でも浴びたやうに爺むさく、以前はつちりしてゐただけ、落窪んだ眼は薄氣味のわるいほどぎよろりとして、何か物でも見詰めるやうに輝いてゐる。

「その時分はいろく御世話になりまして。」と君江は挨拶にこまつて、思出したやうに禮を述べた。

「やつぱり此の邊にゐるのかい。」

「市ヶ谷の本村町に居ります。」

「さう。ちや、またその中、どこかで逢ふだらう。」とそのまま行きかけるので、君江は住處だけでも聞いて置きたいと思つて、二歩三歩一緒に歩きながら、「をちさん。京子さんにお逢ひになつて。わたし其後はしばらく逢ひません。」と鎌を掛けて見た。

「さうか。富士見町に出てゐるさうぢやないか。噂はきいてゐるけれど、このざまちやア行つたところで、寄せつけまいから、いつそ逢はない方がいゝ。」

「あら、そんな事は有りませんわ。逢つてお上げなさいませよ。……」
 「君子さんの方はその後どうしてゐるんだね。定めし好きな人ができて一緒に暮してゐるんだらう。」

「いゝえ。をちさん。相變らずなのよ。とうく女給になつてしまつたのよ。病氣で此の一週間ばかり休んでゐますけれど。」

「さうか。女給さんか。」

話しながら歩いて行く中、川島は木蔭のベンチには若い男女の寄添つてゐる他には、人通りといつても大抵それと同じやうな學生らしいものばかりなので、いくらか安心したらしく、自分から先に有合ふベンチに腰をおろし、「いろいろききたい事もあるんだ。君子さんの顔を見ると、やつぱりいろ／＼な事を思出すよ。むかしの事はさつぱり忘れてしまふつもりで居たんだが……。」

「をぢさん。わたしも今から考へて見ると、諏訪町で御厄介になつてゐた時分が一番面白かつたんですわ。さつきも一人でそんな事を考出して、ぼんやりしてゐましたの。今夜はほんとに不思議な晩だわ。あの時分の事を思ひ出して、ぼんやり小石川の方を眺めてゐる最中、をぢさんに逢ふなんて、ほんとに不思議だわ。」

「成程小石川の方がよく見えるな。」と川島も堀外の眺望に心づいて同じやうに向を眺め、「あすこの、明いところが神楽坂だな。さうすると、あすこが安藤坂で、樹の

茂つたところが牛天神になるわけだな。おれもあの時分には随分したい放題な眞似をしたもんだな。併し人間一生涯の中に一度でも面白いと思ふ事があればそれで生れたかひがあるんだ。時節が來たら諦めをつけなくつちやいけない。」

「ほんとうね。だから、わたしも實は田舎の家へ歸らうかと思つてゐますの。女給をしてゐても、それは別にかまはないんですけれど、つまらない事から悪く思はれたり恨まれたりするのがいやですし、それにいつどんな目に遇はされるか知れないと思ふと、何となくおそろしい氣がしますから……。をぢさん、わたし十日ばかり前に自動車からつき落されて怪我をしたんですよ。まだ、痕がついてゐるでせう。ね。それから腕にも痕が残つてゐます。」と浴衣の袖をまくり上げて見せた。

「かはいさうに。ひどい目に逢つたな。戀の意恨か。」

「をぢさん。男つて云ふものは女よりも餘程執念深いものね。わたし今度始めてさう思ひましたわ。」

「思込むと、男でも女でも同じ事さ。」

「ぢや、をぢさんもそんな事を考へた事があつて、先に遊んでゐる時分……。」

突然土手の下から汽車の響と共に石炭の烟が向の見えない程舞上つて来るのに、

君江は川島の返事を聞く間もなく袂に顔を蔽ひながら立上つた。川島もつゞいて立上り、

「そろ／＼出掛けやう。差間がなければ番地だけでも教へて置いて貰はうかね。」

「市ヶ谷本村町〇〇番地、龜崎ちか方ですわ。いつでも正午時分、一時頃までなら家にゐます。をぢさんは今どちら。」

「おれか、おれはまア……その中きまつたら知らせやう。」

公園の小徑は一筋しかないのです、すぐさま新見附へ出て知らず知らず堀端の電車通りへ来た。君江は市ヶ谷までは停留場一ツの道程なので、川島が電車に乗るのを見送つてから、ぶら／＼歩いて歸らうと其のまゝ停留場に立留つてゐると、川島は

どつちの方角へ行かうとするのやら、二三次電車が停つても一向乗らうとする様子もない。話も途絶えたまゝ、又もや並んで歩むともなく歩みを運ぶと、一歩々々市ヶ谷見附が近くなつて来る。

「をぢさん。もうすぐそこだから、鳥渡寄つていらつしやいよ。」と言つた。君江はもし田舎へでも歸るやうになれば、いつ復逢ふかわからない人だと思ふので、何となく心寂しい氣もするし、又あの時分いろ／＼世話になつた返禮に、出来ることならむかしの話でもして慰めて上げたいやうな氣もしたのである。

「さしつかへは無いのか。」

「いやなをぢさんねえ。大丈夫よ。」

「間借をしてゐるんだらう。」

「え、わたし一人きり二階を借りてゐるんですの。下のをばさんも一人きりですから、誰にも遠慮は入りません。」

「それぢや鳥渡お邪魔をして行かうかね。」

「え、寄つてゐらつしやいよ。をばさんは誰か男の人が来ると、何でもない人でも、いやに氣をきかして、すぐ外へ行つてしまふんですよ。あんまり氣が早いんで氣まりのわるい事がある位ですわ。」

君江は堀端から横町へ曲る時、折好く酒屋の若いものが路端に涼んでゐたのを見て、麥酒三本と蟹の罐詰とを云付け、「をばさん。唯今。」と云ひながら川島を二階へ案内した。留守の中老婆が掃除をしたと見え、鏡臺の鏡には友禪の片が掛けられ、六疊の間にはもう夜具が敷きのべてあつた。川島は障子際に突立つたまゝ内の様子を見てびつくりしたやうに目ばかり光らせてゐるので、君江は何の事とも察しがつかず、「をばさんはまだ病氣だと思つてゐるのよ。今片づけますわ。」と押入の襖をあけて枕をしまひかける。

川島は始めて我に返つたらしく狼狽へた調子で、「君子さん。かまはずに置いてく

れ。お客様にされちやア却つてこまる。」

「ぢや、此のまゝにして置ませう。御厄介になつてゐる時分、着物一つ疊んだ事がないつて能くお京さんに言はれましたわね。だらしが無いのは其時分から、をばさんも御承知なんですから。」と鏡臺の前に在つたメリンスの座布団を裏返にして薦めた。

をばさんが麥酒と蟹の罐詰に漬物を添へて黙つて梯子段の上の板の間に置いて行く。その物音に君江は立つて座敷へ持運び、「をばさん。お着なら何でも御馳走しますわ。表の家が肴屋ですから窓から呼べば何でも持つて來ます。」

川島は君江のついたビールを一息にコップ一杯飲干したまゝ、何とも云はず、明放した窓から見える外の方へ氣をくばつてゐる様子に、君江は一度懲役に行くと思ふまで世間へ氣をかねるやうになるものかと、氣がついて見ればいよゝゝ氣の毒になつて、

「わたし、今日起きたせいでか、暑いくせに何だか風が寒いやうな気がするのよ。」と其の實蒸暑くてならないのに、窗の障子を半ばしめてしまつた。

川島は二杯目のビールに忽ち目の縁を赤くして、「世の中は何といつてもやつぱり酒と女だな。おれももう一度奮發して働いて見やうかと思ふんだが、ひぐたけの入つた身體ぢやどうする事もできない。君子さんなんかは此れからだ。此れから先ほんとうに世の中の味がわかつて来るんだよ。田舎へ歸るなんて、先刻さう言つてゐたけれど、半月と居られるものか。おれ見たやうになつても、赤い布團を見たり、一杯飲んでぼうつとすると、やつぱりむら／＼として来るからな。」

「をぢさん。もうすつかり堅くなつておしまひなのね。」
君江は川島が出獄して後現在どうしてゐるのかきいて見たいと思ひながら、あけすけには問ひかねて遠廻しにかう言つて見たのである。川島は大分好い心持になつたと見え、調子もいくらか元氣づいて、「無い振は振れないから一番いゝのさ。沙婆

へ出てから、乞食も同然、お酒どころか飯も食へない事があつたよ。倅が丈夫でゐたらどうにか力になるんだがね。おれが彼方へ行つてゐる中に肺炎で死んでしまふし、嬢は娘と一緒に田舎へあづけてある始末だ。まだ四五年た、なくつちや藝者に賣る事もできないのさ。以前世話をした奴等に頼んだら、どうにかしてくれない事もなからうが、それ程恥を洒して歩く位なら一思に死んだ方がまだしもだよ。君子さん、今夜の事はあの世へ行つても……をぢさんは忘れないでお禮を言ふよ。」

「あら。をぢさん。そんな事……。わたしの方がいくらお世話になつたか知れませんわ。かうして一人でやつて行けるやうになつたのも元はと云へば、みんなをぢさんのおかげぢやアありませんか。始め事務員になつたのも、をぢさんのおかげだし……。それから段々いろ／＼な事を覚えて……。方々の待合や何かの様子を覚え

たのもやつぱりをぢさんのおかげですわ。」

「は、は、は。今夜のビールはわるい事を教へて貰つた御禮か。それなら、をぢさん

も遠慮せず御馳走にならう。あの時分商賣人の京子がびつくりしたくらゐだからな。今はたいしたもんだらう。」

「割合にさうでもない事よ。あの時分會社の方には随分おちかづきになつたわね。みんなどうなすつてしまつたんでせう。カッフエーでもお見かけした事がありません。」

「さうか。みんな相應に年をとつてゐたからな。それにあの會社もつぶれてしまつたから、窮つてゐるのはおればかりでも無いんだらう。」

「をぢさんなんか。まだくそんなに老込む年ぢやないわ。六十になつても、いやになる程元氣な人があつてよ。」と君江はその實例に松崎博士の事を語らうとして其儘黙つてしまつた。

「遊びも癖になるとつい止められなくなるもんだ。」

「をぢさんなんかも、以前が以前だから、また直に癖がついてよ。」

十日ばかり君江も酒を斷つてゐた後なので、話をしてゐる中に忽ち取寄せた三本のビールを空にしてしまつた。

「商賣だけあつて凄くなつたな。あすこに在るのはウイスキーぢやないか。」

「アラ。病氣や何かで、すつかり忘れてゐたわ。」と君江は棚の上に乗せたまゝにして置いた角壺の火酒を取りおろして湯呑につき、「グラスがないからこれで我慢して下さい。」

「おれはもういけない。」

「ぢやアビールか日本酒を貰ひませう。」

「もう何にもいらない。久振りで飲むとカラ意久地がない。歸れなくなると大變だ。」

「お歸りになれなかつたら、そこへお休みなさい。かまひません。」と君江は湯呑半分ほどのウイスキーを一口に飲干す。

「女給さんの手並みは成程見事だ。」